

て献納せしめたのであるが、これを誤つて手足の爪を抜いたのだと言ひ傳へたのである。千倉置戸とは賠償品を多く倉に納めて献納せしめたのをいふのである。

かくて高天之原を追放された須佐之男命は、それからどこへ行つたのであらうか。まづ紀伊の熊野に行き、そこから出雲に行つた足どりがわかる。それから命と大夜之女命との間に生まれた五十猛命を引き連れて、遠く海外へ木種を求めに行つたらしい。その海外がどこであるかそれははつきりわからない。ただ日本紀の記事によると、むかで、蜂、蛇などの多くゐた所らしい。そんな動物の室内に入つて来るのを防いだ、ひれといふものがあつたらしい。今日我々の使用する團扇(うちば)はそのひれの名残りで、もとは鳥の羽根で作つてゐたらしい。だから打羽の意味で、うちはといふのであらう。

須佐之男命はこの國で何を計畫し、何をしたかわからないが、杉、檜、まき、樟などの木種をそこから持ち歸つたらしい。樟を臺灣語で、ラクスといふから、須佐之男命は臺灣に行つてそこから樟の種を持ち歸つたのであらうといふ學者もある。須佐之男命は外國から歸つた時、息子の五十猛命と一緒にまず出雲へ行つたらしいが、ほどなく五十猛命を紀伊に送つて自分は出雲で身を終つたらしい。五十猛命は出雲意宇郡四十八座の中に、韓國伊太氏(からくにいたて)神社として三箇所に祭られてゐる式内社である。播磨では射楯兵主(いだてへうす)神社として祭り、

紀伊では伊太祁曾神社として祭り、海草郡西山東村に官幣中社として崇拜せられてゐた。この神社は最初伊達神社と云つて、同郡有功(いさを)村に祭り、正一位の位階を持つてゐた。有功村とはこの神が植林事業に功を立てたといふ意味である。仙臺の伊達正宗もはじめはその姓をイダテと呼んでゐたにちがひない。それは陸奥の國色麻(しかま)郡の名神大座伊達(いだて)神社に關係があるのであらう。これはたぶん紀伊の伊達神社を勧請したものだと思ふ。ところが紀伊の伊達神社はその後少しく崇拜者を減じ、山東村の伊太祁曾神社が日本國中における五十猛命の最大の神社となつたのである。その二人の妹大屋津姫、つまつ姫の神社も有功村に祭つてある。そこで須佐之男命は紀伊の植林事業を五十猛命に一任し、自分は出雲に歸つて山陰地方の植林に従事したのであらう。澁川春海の著玉矛拾遺卷五に須佐之男命の墓は、雲州神門郡不老山の麓にあり、杵築大社を去る北一里ばかり是小假山(つき山)なり、今なほ存すとあるのを見ると、出雲で葬られたことが證明出来る。そしてこの須佐之男命を祭つた神社は、今の八束郡熊野村の國幣大社熊野神社である。祭神くしみけぬを、奇御木主だといふ説は信ずるに足る。要するに高天之原での大亂暴の罪をつぐなふため、その老後は専心植林事業を營んだのであらう。

### 須佐神社と須佐之男命



須佐之男命とは、すさぶ男、あはれる男といふことで、高天之原で亂暴をした一青年に命じたあだ名であると我我は解釋してゐたが、出雲風土記飯石郡七郷のうち、須佐郷の條を見ると、須佐之男命が自分の名をこの郷に命じて、須佐郷と呼んだいはれが書いてある。そこには大須佐田小須佐田が定められたといふ點から見ると、須佐之男命とはあだ名ではなく本名であつたらしい。この須佐郷に須佐之男命を祭つた神社を、須佐神社と云つて式内社の小社になつてゐる。須佐之男命を祭つた神社に、氷川神社、八坂神社、熊野神社、日御崎神社、須佐神社、津島神社、劔神社、須佐之男神社などの異名がある。その中で氷川神社、八坂神社の二社は官幣大社であり、出雲の熊野神社は國幣小社で、出雲須佐郷の須佐之男命自身で、自分の御魂を鎮めたといふ須佐神社は、漸くにして國幣小社である。この須佐神社を直接出雲から勸請したと思はれる、紀伊有田郡千田（ちだ）村にある須佐神社は、神名帳に従一位須佐大神とあるほど尊敬せられ、十月十四日の例祭には千田詣りと云つて多くの參詣者が、諸國から集まつたものであるが、今は縣社の社格で、その子五十猛命が官幣中社であつたにかかはらず、縣社の社格に甘んじてゐたが、千田詣りの習慣も絶え、世人に忘れ去られさうになつてゐる。福岡縣京都郡今元村の縣社、廣島縣世羅郡廣定村の郷社須佐神社なども、出雲から勸請せられたものであらう。

武藏の官幣大社氷川神社は、出雲の簸の川の名から來たものであらうが、簸の川上には須佐之

男命を祭つた伊我多氣神社がある。けれどもこの神社を勸請したといふ文献もなく、熊野神社を勸請して氷川神社と名づけたとも思はれない。また氷川神社が武藏國に祭られた原因と、多くの分社を持つてゐる理由は殆どわからない。但し明治以後官幣大社氷川神社として有名になつたのは、明治天皇が遷都の直後ここに參拜せられ、親祭されたからである。それは高天之原で大亂暴をしたと傳へられる須佐之男命に對して、遷都以後の皇城を安穩に守るやうにとて、これを慰めたのである。

### 島田三郎氏の講演と須佐之男命

明治四十年の春であつた。東京神田のキリスト教青年會館で、島田三郎氏の演説があると聞いて、私は二三の友人と連れだつて聞きに行つた。その演説の内容は日韓兩國がもつと仲よくしなければならぬといふ意味で、例の立て板に水式の雄辯でいろいろの話をしたが、その中で深く私の腦裏にしみ込んだのは須佐之男命が朝鮮のソシモリといふ所にゐたといふ話であつた。島田氏は春日小社記に、ソシモリ神社といふ宮のことが書いてある。そのソシモリとは朝鮮語の牛の頭といふのだと詳しく説明した。島田三郎といへば熱心なクリスチャンであり、東京毎日新聞の社長であり、政界の大立物として世間に知られた有名人であつたから、私はその話を頭から信じ



てしまった。ところがその後私は群書類従を讀んで、その神祇部第十七卷に、春日小社記を發見した。私はそれを讀む前に島田氏が壇上でフロックコートの中のポケットから白いハンカチーフを取り出して、口のまはりを拭つた光景と、平おもてのその顔がありありと眼底に見えて來た。ところがその小社記の中からソシモリ神社の名を發見することが出來なかつた。何度も何度も繰り返して見たが、水屋明神三所所謂牛頭天王是也の十四字を見つけたのであつた。この牛頭天王の水屋明神を、ソシモリ明神と讀んでゐたのかも知れない。まさか島田三郎氏がでたらめを云ふはずはないと、今に思つてゐる。日本紀に、須佐之男命が新羅の國會屍茂梨にゐたと書いてある。その國會屍茂梨とは牛の頭といふ朝鮮語で、そこを牛頭山と云ふ意味で、ソシモリと呼んでゐたのだといふ説が段々わかつて來た。今も朝鮮の人は牛の頭を、ソウモリまたはソシモリと云つてゐる。牛の韓語がソシであるから、牛といふ日本語はそのなまりではなからうかなどとまで考へるやうになつた。そのソシモリの地は今の江原道春川府を、昔牛頭州と云つたからそこであらうとか、慶州がそのソシモリだなどといろいろの説を立てる學者がある。とにかく日本の須佐之男命を牛頭天王だと云ひはじめた原因が、このソシモリにあるのかも知れない。

出雲の熊野神社に須佐之男命を祭つてゐるのは、須佐之男命が朝鮮の熊成峯にゐたと書紀の一書に書いてあるのに原因するといふ人もある。その熊成峯は、今の忠清道公州府の熊津だといふ

説もある。また慶尙道の熊川だといふ。ナレとは朝鮮語の川といふことであるから、熊川、熊成は同意義で、くまなる、の約語が、(くまぬ)熊野だといふ説もあるが、本居内遠は本宮神社考定を書いて、熊成とは紀伊の熊野のことで、たぶん大塔山であらうと云つてゐる。しかしこの説は疑はしい。さてどうして須佐之男命を牛頭天王と云ひはじめたかといふ研究は、備後國風土記にある蘇民將來の一文からはじめなければならぬ。それは昔北海に武塔神といふ神があつて、南海神の娘と結婚するため八萬里の遠路を歩いて疲れきつた時、蘇民將來の家に行つて一夜の宿を乞うた。蘇民將來の弟に巨且將來といふ一百の倉庫を持つ金持があつた。最初武塔神はこの巨且將來に宿を求めたが借してくれなかつた。そこで蘇民將來の所へ行くと、最も貧乏な蘇民將來は、粟柄で作つた座蒲團を出し、粟飯を炊いて捧げた。それから武塔神はそこを去つて南海神の所に行き、結婚後八人の子女を得て北海に歸る途中、蘇民將來の家に立ち寄り、前年の徳に報ゆるため、流行病の時病をのがれる茅の輪を與へ、且入口に蘇民將來の子孫と書いてはつておけば疫病神は入つて來ないと教へた。そのとき武塔神が、吾は速須佐之男神なり、と云つた言葉から、須佐之男命は武塔神であり、その武塔神は牛頭天王であるといふ説が起つたのである。けれども朝鮮のソシモリと、須佐之男命との關係、ソシモリと牛頭天王との關係はこれを明かにする文献が見當らない。



## 須佐之男命は日本人である

日本人である須佐之男命を、牛頭天王といひ、祇園様と云つて祭るのは何故であらうか。牛頭天王とは印度語のクマ・キリバヤ・ダイバ・アラムシヤで、クマは牛、キリバヤは頭、ダイバは天、アラムシヤは王である。天野信景著牛頭天王辯に書いてある。南天竺のモラヤ山に白檀、赤檀を産する山があつた。白檀は熱病を癒し、赤檀は風邪を癒すので、いつしかこの山の名が天竺の人人に知られた。この山の形が牛の頭に似てゐるので牛頭山と呼んだが、この山から名薬を出すのでその神徳を稱へて、牛頭天王と尊稱した。

舍衛國の太子祇陀の所有してゐた樹林を釋迦に供養した。釋迦はこの樹林を愛して、そこで度法を説いた。その樹林を後に祇園と云つたが、その鎮守の神として祭つたのが牛頭天王である。ところがその國に須達といふ長者があつて、この釋迦の説教した場所に自分の邸宅を移して、これを祇園精舎と名づけた。これは遠き印度の話であつて日本とは何の關係もないことである。しかしそこに一つの關係が生じて來た。それを平田篤胤著牛頭天王曆神辯によつて、かいつまんで語つてみる。右大臣吉備眞備が十八年の留學を終へて支那から歸つて來たのは、天平七年で彼が四十二歳の時であつた。眞備が留學生となつた時は從八位下の低い位であつたが、その歸る時持

つて來た書物に天衍曆經一卷、大衍曆立成十二卷があつた。これは道教の陰陽説から出た方位方を論ずる書物で、當時の日本ではまだこの曆法を知つた者が少なかつた。そこで眞備はこの十二卷の曆法書をもつて自分の身を立てようとした。

眞備が歸朝の時その船が播磨の港に入つたが、船の舳に立つて陸地を見ると、西北にけはしい山がそびえてゐる。その山容がいかにも崇高なので、船を下つてその山に登つてみた。すると一人の老人が現はれて、自分は須佐之男命である。庶民を守り百王を保護せんがため、この峯に來て年久しく住んでゐるが、誰も自分のことを知つた者がない。汝は速かに自分がこの峯に居るところを天皇に奏上せよ、と云つてその姿を消した。この山は播磨國しかま郡にある廣峯で、そこに須佐之男命が降臨してゐるといふ説を流布すれば、必ず世人の信用を得ると考へた眞備は、その後備後國の古記録を讀んで、それに武塔神と蘇民將來且將來の話が載つてゐるのを見て、その武塔神を須佐之男命であると云つたのである。武塔とは、たけあらし、の意味だと平田篤胤は云つてゐる。昔の忌み言葉に、塔をあらしきと云つた。だから武塔とは、武く荒い神といふ意味でたけあらしの神としたのであると篤胤は云つてゐる。この備後の古記に書いてある武塔神の記事を讀み、印度の牛頭天王の話などをまとめ一つの説を立て、遂に日本の祇園を造り出したのである。



吉備眞備が書いたのだといふ蓋蓋(ほき)内傳といふ書物がある。その原本に阿部晴明がいろいろのことを書き添へ、金烏玉兎集と題した書物が残つてゐる。この書物によれば武塔神は須佐之男命であり、牛頭天王である。牛頭天王の妻破利采女は櫛稻田姫であり、その八子は八將軍となつてゐる。

武塔神の牛頭天王が南海から歸つて、蘇民將來を訪ねた時、巨旦將來の家を襲つてその一家族を全滅し、疫病をもつてその一族を皆殺しにした時、蘇民將來の一族には、腰に茅の輪をつけて病難を免れしめた。その時から牛頭天王は疫病神として恐れられ、茅の輪を腰につけた者と、蘇民將來子孫の六字を家の入口にはりつけた所には疫病神が入らないといふ約束をせられた。印度の名薬の神である牛頭天王は、日本で恐ろしい疫病神となつたのである。のみならず一月一日の赤白の鏡餅は、斬り殺した巨旦將來の肉と骨であり、三月三日の草餅は、巨旦の皮膚であり、五月五日の茅卷は巨旦の髪であり、七月七日のそうめんは巨旦の筋であり、九月九日の菊酒は巨旦の血であり、門松はその墓の標である。かうして貧しき者、疲れたる者を憐れまなかつた巨旦を調伏するために、一年中の行事があるのだと云つてゐる。今でも☆の形を書いて悪魔除けとするのは、牛頭天王が教へた病除けのまじなひであるといふ。

こんなことは子供だましの笑ひ話ですむが、これ以外に最も罪の深いいだづらを、眞備は日本

人に教へこんだため、今日に至るまで一部の人人に大きな恐怖を抱かしめてゐる。牛頭天王が蘇民將來に誓つた言葉に、吾は末代疫病神となり、汝の子孫のほかは悉くこれを殺さん、末代の衆生もし寒熱の病を受けたならば、すなはち吾が家來達の所業だと思へ、と云つてゐる。牛頭天王の妻破利采女は歳徳神として崇められ、正月元旦にこの神を拜まなければその年一年を無事に過すことは出来ない。ところがこの神は年年その居所が違ふ。その居所を明(あけ)の方と云つて、きのえつちのとの年は、きのえの方に居り、きのとかのえの年は、かのえの方に居るといふのである。そのくり出し方は、

- 甲 巳……………甲の方　　といふ簡單なものである。この方角を明の方といふのであるが、  
乙 庚……………庚の方　　これを知らないと年徳神が祭れない。年徳神を祭らないならば、  
丙 辛……………丙の方　　その一年を安心して暮せない。だからこの明の方を知ることが生  
丁 壬……………壬の方　　活上の大事件である。この方位が毎年變るので年徳神の神棚は自  
戊 癸……………丙の方　　由に廻轉出来るやうにしてある。それからこの年徳神の生んだ八

人の子供は、八將神となつて年中その居所を變じて遊行するので、その居る場所を知らないで木を伐つたり、旅行したり、ふしんをすれば大變なことになる。この八將神のゐる所を穢したならば、必ず死ぬとか、三年間不運におそはれるとか、恐ろしいことを云つてゐる。



今一つひどく日本人を驚かしつけた金神説がある。金神とは牛頭天王に八つ斬りにせられた巨且將來の亡魂で、萬物を枯らし殺すことを司る恐しき神で、金神の七殺と云つてこの神を犯したものは、一家七人を殺す、その家がもしも五人家内であつたならば、隣りの二人もまき添へにして満足するといふのであるが、この金神は五日目毎に居所を變へるから、實に油斷のならぬ神である。こんな曆神説が眞備のために日本中へひろまつて、國民は疫病からのがれるために牛頭天王を祭り、八將神、金神の祟りを逃れるためにその方位を犯さぬやう注意しなければ、安全な生活は出来なくなつたのである。この牛頭天王を播磨の國廣峯で直接見た吉備眞備が、その場所へ祭つた牛頭天王社をそれから百三十六年目の貞觀十一年に、圓如大法師が山城愛宕郡八坂郷に勸請して、皇室をはじめ都の人人を疫病から守護するため、感神院の境内に祭つて、そこを祇園と云つた。天皇でも公卿でも百姓町人でも、疫病から逃れる方法はその頃なかつたのである。何とかして恐ろしい病難から逃れたいと思つてゐる時、播磨の廣峯から牛頭天王を勸請して八坂郷に祭つた時、この神が八萬四千六百五十の部下を率ゐて、全國民に疫病を傳染させるといふ話を聞いて、洛中洛外は大變なさわぎであつたらう。元來牛頭天王は印度の靈藥の神であつたが、日本へ來ては牛頭天王が自分を冷遇した巨且將來の一族を全滅せしむるため、八萬四千六百五十の部下を四方に派遣して疫病を流行せしむるといふことになつたのである。そんな神様に暴れられては大變

だといふので、その疫病王の牛頭天王はじめ、その部下を慰さめるため御靈會の大祭を行つたが、都民はこの神を信じなければ悉く疫病に感染すると信じたため、その參詣者が非常に多かつたが、立派な社がなかつた。そこで時の攝政藤原基經は印度の須達長者が祇樹園に自分の邸宅を移して、これを祇園精舎とした故事にならひ、自分の邸宅も八坂に移して、そこを祇園精舎と云つた。その後祇園様といふ名は日本全國にひろまり、津津浦浦にその分社が數限りなく建てられ、八坂の祇園社で行はれた祭禮の笛太鼓のはやしは、祇園はやしと云つて至る所で老若男女に親しまれるやうになつた。平家物語のはじめにある、祇園精舎の鐘の音は諸行無情の響あり、といふ一節が、いやしくも文字を解するものには、宗教的の觀念を起さしめずにはおかなかつた。今日に到るも、村村の祭禮に祇園はやしの笛太鼓が、どれだけ參詣者の心を宗教的に興奮せしめつつあるか、それは思ひ半ばに過ぎるものがある。

京都を訪ふ者は、必ず祇園町の祇園様にまゐるであらう。明治維新後この祇園様は、須佐之男命であるとして、名を八坂神社と改め、官幣中社に列し、大正四年に官幣大社の社格を得たのである。けれども參詣者の多くは、やつぱり祇園様を拜むのであつて、須佐之男命がその祇園様だといふことを知らない者が多い。それもそのはずで、毎年七月三十一日の例祭に、八坂神社へまゐつて見ると、八坂神社守護所で配つてゐる守札、蘇民將來子孫也と書いた惡病除けの守札と、



悪病除茅輪守札とを出してゐる。茅輪守札の端に二本の短い紙よりがある。それを煎じて飲めば如何なる難病も直ちになほるといふのである。樓門の柱には、本日及明一日に限り悪病除茅輪守護受與と揭示し、社前の鳥居には大きな茅輪を作つて、参拜者にそれをくぐらしめてゐる。この茅輪信仰は備後風土記にある武塔神が蘇民將來に與へて、疫病を逃れしめたといふそのままの信仰であり、須佐之男命とは何の關係もない話である。ただ一言その武塔神が蘇民將來に、吾は速須佐之男神也と云つたと書いてある記事から、須佐之男命としてこれを、官幣大社にまで昇格させたことは、研究の餘地がある。けれどもこれまでこれを議論する者がなかつたのは、さはらぬ神に崇りなしの恐怖心が、これを沈黙せしめたのである。

備後風土記にある武塔神とは、いふまでもなく日本語ではない。と云つて支那にも朝鮮にもこの名に該當する神はない。平田篤胤がこれを須佐之男命説に賛成したかのやうに、たけあらしの神と讀ませたが、その説は一般に知られなかつた。殊に蘇民將來巨旦將來などいふ名は、さつぱり意味のわからない名である。牛頭天王だけははつきり印度の神であることがわかる。しかしこの神は印度では名薬の神として尊敬されてゐるのであるが、日本では吉備眞備の説で、病氣を直すとは正反對に、病氣を傳染させる恐ろしい神となつてゐる。

以上の如く備後風土記の説は、全然とるに足りない空説である。牛頭天王が須佐之男命であつ

て、その妃波利采女が櫛稻田姫であり、その二人の間に八將神が生れ、我々の住む周圍を遊行して、その遊行を犯した者には恐ろしい、刑罰を與へるなど、最も甚しい迷信を日本人に與へたこの曆神説から考へても、これを日本の神社であるといふことは、とうてい考へられない。

出雲には國幣大社熊野神社がある。この神社こそ正しく須佐之男命の神社であらう。こんな素性のはつきりした神社が國幣社であるのに、八坂神社が官幣大社となつたのは、どういふわけであらうか。今日では官幣も國幣もなくなつてゐるが、こんな素性のわからない神社を、みだりに昇格せしめたことは、日本の神社を知識階級から引放さしめた以外に何の効能もなかつた。むしろ官幣大社といふよりも、印度の牛頭天王として祇園様で存在せしめるのが本當ではなからうか。須佐之男命は日本人である。熊野神社、氷川神社、須田神社などの名で祭られてゐる。何を苦しんで牛頭天王だの、武塔神だのといふ名のつく神として祭る必要があらうか。祇園様といへば直ちに祇園精舎を連想し、祇園精舎といへばすぐ諸行無情の鐘の響を思ひ出だす、だからこの際思ひきつて感神院の昔にかへり、あの境内から京の街街に諸行無情の鐘を響かしめ、祇園ばやし

の笛の音、太鼓の音を一般民衆に親しましめるがよいと思ふ。

尾張國海部郡藤波里にある津島牛頭天王社は、後に國幣小社となつてゐるが、この神社も武塔神牛頭天王が、南海に行く途中この地に立ち寄つたといふ説を主として、牛頭天王を祭つたらし



い。けれどもその牛頭天王が須佐之男命であるとは云はなかつたやうである。東鑑には、津島立符巻數、須佐之男命の社と書するのは、後世の祠官の私稱也、とあつて、須佐之男命説を否定してゐる。この神社に、御芦の神事があつて、海岸に流れ寄る芦を束ねて、それを牛頭天王として祭つたらしい。芦の束と茅の輪に關係があるのかも知れない。この神社から出す柳楊の木を削つた札に、蘇民將來子孫の字を書きつけてあつたらしい。

この津島の牛頭天王と、廣峯の牛頭天王とは少しく系統が違ふらしい。

### 大國主命とその子達

天照大神が太陽教の教主となつて以來、その傳道が非常に効果を収めたことは、出雲族の統領である大國主命が、全國にわたる廣きその領土を、悉く太陽教のために捧げたのでもわかる。出雲族が農業を奨励して日本國中に開拓の手をのばし、豊葦原を瑞穂の生ずる田圃と化した功勞は、現代までも賞め稱へられてゐる。豊葦原瑞穂國と一口に云ふが、葦の茂つた土地は、米一粒粟一粒を取ることに出來ない無用の土地である。それを根氣よく耕して立派な田畑としたことは、實に出雲族の大事業であつた。出雲の國仁多郡八ッ村の田植歌に、

神代には、やれ、出雲の鋏で打ちひろめ、やれ、打ちひろめ、打ちひろめ、やれ、豊葦原

を田になさる。

と云ふのがある。豊葦原瑞穂國とは、豊葦原を開拓して瑞穂の出來る良田にした、といふ意味で、いはば農民が苦心して食料を生産する國といふことである。

高天之原族の使命は太陽の高徳を一般人に知らしめ、太陽教の教を宣傳することである。その高天之原族の宣傳した太陽教を深く信じた大國主命が、感激して廣大な領土を全部天照大神に献納したことは、ふしぎでも何でもない。深く宗教を信じたものは、自己の生命も祖先傳來の財産も、惜しみもなくその宗教のために捧げてしまふのが本當である。天理教を信じた信者がその財産をすつかり捧げてしまつた時代がある。その時代が天理教の最も盛んな時であつた。神學だの哲學だのと云つて理窟をこねるやうになつた時は、その宗教が下火になつた證據である。太陽教の宣傳がはじめられて以來、第十二代目の天照大神の時、はじめてその全盛期に入つたのである。天照大神はこの大國主命の思ひ切つた献身に對して、大國主命同様に思ひ切つた報賞として、日本國の顯幽合治政治を、顯幽分治政治となし、その幽事を全部大國主命に與へ、太陽教主は顯事のみを司配することになつた。幽事とは死者の靈魂を司どること、顯事とは生ける人民の統率をすることである。大臣以下一般人の善事を行つた者には、政府が賞典を與へ、惡事を行つた者はこれを處罰する權利を天照大神が握り、死して後のかくり身に對する總ての處置は、大國主命



にその権利を與へたのである。換言すれば政治は天照大神に、宗教は大國主命に、といふのである。大國主命も思ひきつたことをしたのであるが、天照大神のこの宣言も、實に思ひ切つた行爲であつた。

天照大神は從來のいきさつを捨て、全く新しい政治を布かんがため、皇孫ににぎの命に三種の神器を授けて、九州の地に行かした。そして大國主命には出雲の多藝志（たぎし）の小濱に、日隅（ひす）の宮を建てさせ、そこに太陽教主と同様の待遇を與へて居らしめることにした。

大國主命とは、多くの國を司配するといふ意味であるから、日隅宮に入つて幽事を司るやうになつた後の名は、大物主命といふべきである。ものとは死者の魂であるから、その總司配人が大和の三輪山に葬られた大物主命である。この命には多くの名があるので大名持といふ。これを訛つて大名むち、大穴むち、大むし、といひ、また葦原しこ男、八千矛、大國魂、現し國魂、くしみか魂、八島じぬみ、大國つくり、廣矛魂、大常主、天が下常主、伊和の神、國つくりの神、天が下つくらしの神、隠れ事治しめす神、出雲の大神、出雲みかげの大神、杵築の大神、などがその主なる名である。昔の人が汝と云つたのは、名持といふ意味で、名を持つてゐる人を貴んで使つた言葉である。だから太古の人には名のない人が多かつたのかも知れない。今でも多くの勞働者間では紀州、土佐、越後、などとその生まれ故郷の名を呼んで、その姓名を云はないですましてゐるこ

とがある。昔は相當の生活をして居る人でも、柿本猿、柿本枝成、物部おこせ、阿曇ほたる、石川むじな、佐伯いたち、石上かつを、巨勢馬飼、大伴家持などの名で通つてゐた。それはその人の職業や顔容から、周囲の人がつけた名であらう。頭が大きいので、さいづち頭といふロシヤ語モロトフが世界的になつたやうに、人間の符號である名前は、昔も今もやつぱり符號である。だから大國主命の符號は、もつと數多くあつたかも知れない。

この大國主命を祭つた神社は、官國幣社のみでも十四社の多きにのほり、縣社以下の神社は數ふるにいとまがない程である。殊に大黒様といふ袋を背負うた姿になると、全國の家毎に祭られてゐる程である。

出雲の大社は穗日命が大國主命に仕へた場所で、大和の大三輪神社はその墓地であり、日本人が死者を葬つた墓を拜んだ史實を今に物語つてゐる。何故かくの如く大國主命が全國的に神社として祭られてゐるかといふに、この日本の國土を開拓した大恩人を記念すると同時に、その領土が一朝にして天照大神の領土となつた時の心境を察して、我我は太陽教主に治められてはゐるが、あなたの御苦心は深く感謝してゐる、どうぞ恨みに思はず安心して幽事におはげみ下さい、と云ふその崇りを恐れる心から、これを慰め祭るのである。

この大國主命と共に國土を經營した少名彦命が、磯崎酒列神社、加太神社以外にあまり祭られ



てゐないのは、日本に於ける事業を終つて常世の國へ無事に歸つて行つたので、その祟りを恐れる必要がないからである。

大國主命は幾度か政略結婚をした。最初に結婚したのは因播の首長で、その地方に勢力を張つてゐた八上姫で、その間に一人の男子が生れた。ところがその頃大國主命はまだ一國を統治にする力がなかつたので、父須佐之男命が西方根の堅州國に行つてゐるので、そこへ行つて暫く修養することにした。ところが須佐之男命はすぶん慘酷に似た扱ひ方をして、大國主命を鍛錬した。その試鍊に耐へ得たのは、須佐之男命のそばにゐた、すせり姫がその試鍊を切りぬける術を教へたからであつた。そしてその國を去つて日本へ歸ることになつた時、須佐之男命は、自分の愛用してゐた太刀と弓とを大國主命に與へて、すせり姫と共に出雲へ歸らせた。因播では八上姫が待つてゐた。けれども歸つて來た愛する夫は、すせり姫といふ新しい妻を連れてゐた。このすせり姫は須佐之男命の命令で、大國主命と結婚したのであるから、勝手に呼ばひ合つて結婚した自分とはわけが違ふので、きつぱり復縁を斷念して、二人の間に生れた愛する男の子を、大國主命の住んでゐる家の庭木の股に乗せておいて、因播へ歸つて行つた。この子が成長して御井神、福井神、生井神などと呼ばれる水利の神となつたのである。延喜式によるとこの木の股の神は、出雲の秋鹿(あいか)郡と出雲郡に、大和では宇陀郡に、美濃では多藝郡と各務(かがみ)郡に祭ら

れてゐるところを見ると、大和から美濃あたりに住んでゐたのかも知れない。岩手縣水澤町に祭つてある國幣小社駒形神社の祭神も、この木の股の神であらうといふ説がある。

その頃越の國に勢力を張つてゐる女首長があつた。名を沼河(ぬなかは)姫といつた。大國主命はこの國を自己の勢力範囲に入れるため、その首長沼河姫と結婚して、その間に生まれたのが今の官幣大社諏訪神社の祭神、建御名方富命である。

建御名方富命は大國主命の子達の中で、最も力の強い勇氣な男であつた。高天之原と出雲族との間に國ゆぐりの議論が起つた時、大國主命の決心をうながすべく、使者となつて行つたのが、今の茨城縣香島神宮に祭られてゐる、たけみかづちの命であつた。たけみかづちとは建御嚴之父の意で、勇氣に富んだ嚴格なる人であつた。大國主命の後継者事代主命も、國土獻納の議に賛成したが、一人建御名方富のみはあくまで不賛成で、その談判中大きな石を捧げてその場に乗りこみ、誰が何と云つても自分はこの國土獻納に反対であると怒號したので、建みかづちの命は建御名方富に腕相撲で解決しようと申込んだ。腕相撲は日本の昔から明治時代まで盛んに行はれた競技である。ところが強力を誇る建御名方富も、葦の莖を折る如く苦もなく負かされてしまつた。建みかづちの命は、使命を終へて天照大神にこのことを報告すると、下總、常陸の地を賜はつたので香島の地に住んでゐた。今の官幣大社香島神宮はこの命を祭つた神社である。その近くにあ



る官幣大社香取神宮の祭神は、ふつ主の命である。ふつ主とは、ふつのみたまの劍を持つてゐる人といふ意味で、この劍を持つてゐたのは、建みかづちの命であつたから、つまり香島神宮と香取神宮は同一神である。後にこの劍は神武天皇の手に入り、大和の官幣大社石上神社に納まつたのであるから、香取神宮も石上神社も同一のものである。群馬縣北甘樂郡一之宮の國幣中社ぬきさき（貫前）神社も、ふつ主命を祭神としてゐる。貫前とは最初拔鉞と書いてあつた。ふつのみたまの劍を祭つた香取神宮から勸請されたものであらう。ふつとは、よく斬れるといふ意味で、今でもふつつり切れたといふのは、この劍から來た言葉である。

質朴な氣風に富んだ時代であつたから、建御名方富は一生信濃以外に出ない約束で、その妻八坂とべと共に諏訪にゐて、信濃一國を治めてゐたのである。八坂とべは海津見家の一族安曇族から來た女で、とべとは守備隊長の意味である。

いつの頃かわからないが建御名方富の母ぬな河姫は、越の國から信濃へわが子に會ひに來たらしい。長野縣諏訪郡矢ヶ崎に郷社御座石神社がある。その祭神は沼河姫で社前に平たい大きな石がある。山坂を越えてこの蓼科山麓の矢ヶ崎まで來て、この石に腰を下して休んだのであるといふ傳説が、この神社を建てしめたのである。新潟縣西頸城郡南村にも奴奈川神社があつて、沼河姫を祭つてゐる。この神社は頸城郡十三座の中にある名神小座の式内社である。建御名方富は勇

氣があり力量もあつたが、腕相撲に負けたため、建みかづちとの約束を守つて信濃の諏訪に隠遁してしまつたことを、非常に氣の毒に思ふ人達が、全國到る所に諏訪神社を建ててこれを祭り、これを慰めたのである。その分社は全國に凡そ一萬の多きに達するほどである。しかもこの神があくまでも天照大神に反抗した神であり、そして建みかづちとの相撲にもろくも負けたにもかかはらず、これを一萬有餘の神社として祭つてゐる理由を考ふる時、日本の神社の意義がはつきりわかるのである。

信濃の戸隠山にある國幣小社戸隠神社の祭神を、手力男命として、手力男命が天岩戸を開いた時、力餘つてその岩戸が天から落ちてこの山に土中深く埋もれたといふので、戸隠山と名づけたといふ傳説は取るに足りない。本居宣長はこの戸隠神社の祭神は、強力な建御名方富を祭つたのであらうと云つてゐる。

政略結婚で越の國を味方に取りこんだ大國主命は、西九州を自己の管下とするため、まず筑前宗像郡の沖の島にゐる、たぎり姫と結婚してその間に、あぢすき高彦根を生んだ。あぢすき高彦根は一言主または言避神と云つて、イエスカノ一かを一言で決定する、非常に決斷力の強い人であつた。だから國ゆづりの際にも直ちにイエスを以つてこれに答へたのであつた。この人は非常な美男子として名高かつた。この美男子は國ゆづりの後、高天之原に程近い葛城の高賀茂にゐて、



天照大神を守護したので、後に高鴨阿治須岐託彦根神社または葛木坐一言主神社として祭られ、土佐では國幣中社土佐神社と崇められ、日光の二荒山神社にはその兩親と共に祭られて、國幣中社となつてゐる。福島縣東白河郡の國幣中社都古別神社にも、あぢすき高彦根を祭つてゐる。

大國主命はたぎり姫と結婚すると同時に、同じ宗像郡の田島村のたきつ姫と結婚して、事代主命を生ませる。

たぎり姫とたきつ姫とは、いちき島姫と共に宗像三神と云つて、天照大神と須佐之男命とが高天之原の後継者を定めた時、天照大神の推學した三女神である。この三女神は高天之原から豊前の宇佐に下つて、暫くそこにゐたが、その後當時の朝鮮支那と交通の要津であつた、今の福岡縣宗像郡田島村の邊津宮（海濱）にたきつ姫をおき、大島村の中津宮にいちき姫をおき、沖の島の沖津宮にたぎり姫をおいて、その三人に入船出船を監視せしめたのであつた。大國主命がたきつ姫、たぎり姫の二人と同時に結婚したのは、その入船出船の一番大切な沖の島と田島村とを、自分の領内にしたのである。大島村にゐた中津宮のいちき島姫は、いつしか安藝のいつく島に行つて、そこで海外貿易のことを監理してゐたらしい。有名な廣島縣佐伯郡の官幣中社嚴島神社は、このいちき島姫を祭つたのである。たぶんこの神は大國主命の保護を受けないで、獨立して海運の事業に従事したのであらう。佐賀縣松浦の國幣中社田島神社、島根縣邑智郡市木村の縣社市杵

神社の祭神も、いちき島姫である。

宗像の邊津宮たきつ姫の生んだ事代主は、濃厚な性質で、國ゆづりの問題が起つた時も、美保が關で鯛を釣つて遊んでいたが、父大國主命からの使を受けて、早速國ゆづりに賛成して隱退を決心した。後世誰かが七福神の説を立て、大國主命の大黒様よりも先に、惠比須様として崇めてゐるのは、こんな大事件の時でも平氣で鯛を釣つて遊んでゐるほど、心に餘裕のある人だといふのであらう。けれども實際はそんな浮いた心ではなかつたらしい。國ゆづりの談判が終つた後、事代主命はあぢすき高彦根命と共に、高天之原にのぼつて天照大神を守護することになつた。當時の高天之原は大和國高市郷であつた。そこで事代主命は高市森に御屋を築いてそこに入つた。この宮は雲梯（うなで）郷の雲梯森にあつたと云ひ、高市にあつたといふ二説のどちらが正しいか、今は確實な遺蹟を定めることは出来ないが、延喜式葛上郡十七座のうち、名神大座事代主命神社がある。昔から賀茂、大三輪の兩家は有名な豪族で、大和朝廷に仕へてゐたのを見ると、事代主、高彦根命の一族が大和で勢力を張つてゐたことは、この一族が大和に落ちついてゐた證據である。今に至るまで宮中神祇官八神殿に事代主命を祭つて、出雲族の神を代表させてゐるのを見ると、國ゆづり後の事代主命は、よほど勢力を持つてゐたらしい。出雲の美保が關に國幣中社事代主神社があり、徳島縣阿波郡八幡町に郷社事代主神社がある。神戸市の官幣中社長田神社



は、神功皇后以後に出来た神社で、國ゆづりとは関係がない。

出雲族の祭神の主なるものはこのほかに、大年神とその子御年神、大山咋（ぐひ）命がある。大年神は須佐之男命の子であつて、大國主命の弟にあたる。本居宣長によれば、大年とは大は美稱、年は田寄せである。田寄せとは田に寄せて神のめぐみを現はすことで、米の豊作不作は神の賞與と罰であるといふ意味であらう。

大年神の子御年神は、父と共に農業の神であつたが、非常な權威をもつてゐたと見え、ある時大國主命が牛を殺してその肉を百姓達に食べさせたと聞いて、非常に立腹し、イナゴを大國主命の所有する田に放つて、その稻を害せしめた。そこで大國主命は甥にあたる御年神に謝罪したといふ記事が、古語拾遺に書いてある。これで見ると御年神の權威は農業に關してのみ大國主命の上にあつたらしく。

大年神も御年神も結局百姓を守る神で、静岡市にある大年御祖神社は國幣小社で、兵庫縣美法郡西濱の縣社大年神社は式内の社である。同じ兵庫縣神崎郡土師、同郡八千穂村、同郡粟賀村、飾磨郡御國野村、同郡菅野村にある五つの大年神社は皆郷社である。宮崎縣西諸縣郡那須木村にも郷社大年神社がある。

御年神社は大和の葛城に昔から名神大座として知られた式内社である。

大山咋神は大年神の子で、大國主命の甥にあたる。大山々ひとはどういふ意味であるか、これを説明した學者はない。本居宣長すら、その意味は考へ得ずと云つてゐる。想ふに、大山咋とは大山口の意であらう。日本では溝口、谷口、川口、山口などと云つて、山にのぼるその入口を山口と云つた。山にわけ登らうとする人たちが、その入口で無事を願つた神社を、山口神社と云つた。耳なし山口神社、鴨山口神社、巨勢山口神社などのやうに、日吉山の入口に祭つてあつたのが大山咋命であつたらう。この大山咋を山末大主神ともいふ。山末とは山頂のことで、山麓と山頂と同じ神を祭つてあつたのだと思はれる。山の頂を峠といふのは、麓からそこまで無事に登つて來たことを感謝して、手向ける意味で、たうげ、といふのである。だから日吉山の入口と名の頂とに、大山口神社と山末大主神とのあつたことが想像される。この大山咋命はやはり農業を守る神で、日吉山麓琵琶湖畔の地に住む農民の指導者だつたのであらう。この神が一生を終つた時、伯父大國主命が大三輪山に葬られて、その山を墓地とした如く、日吉山の一部である牛尾山にそのなきがらを葬り、日吉山全體を大山咋命の墓地として、これを拜んでゐたのだといふことは、前にくはしく述べてある。だから後の官幣大社日吉神社は、日吉山全體を大山咋命の墓地として拜むために建てたのであらう。然るに僧最澄が延曆寺を創めた時、大山咋命を鎮守として祭り、僧空海が高野山を開いた時、そこを持つてゐた丹生津姫を鎮守として祭つたやうに、大山咋



を祭つて鎮守としなければ、氣の休まらない心理があつたのであらう。けれども大山咋命よりも大國主命の方が、更に大きな勢力があるので、大和の大三輪神社から大國主命を勧請して、これを東殿に祭り、その宮を大日吉神社といひ、鎮守の大山咋命を西殿として、これを小日吉神社と云つた。つまりひさしを借して母家を取られた形であるが、依然として世人は大山咋の西殿を深く信仰した。

太田道灌が江戸城を築いた時、この日吉神社を城内に勧請して、江戸城の鎮守とした。その後徳川家康が江戸城に入つた後、これを紅葉山に移したが、火災にあつた後赤坂溜池に移して、これを江戸市民全體の産土神とした。今日まで存在する麴町にある元官幣大社日枝神社は、徳川四代將軍家綱の時建てたものである。世にこれを山王様と云つて、なんとなく神佛混合時代の香がぬけきれず、靖國神社よりもはるかに社格が高い神社であると知らない市民が多くあるのは、大山咋といふ名を知らないと同時に、それが山王様といふ佛教意識に強く包まれてゐるからであらう。

### 顯幽分治條約締結後のいきさつ

顯幽分治の約束が出来たので、隠り身のこととは全部大國主命に一任し、高天之原の後継者と定

まつた忍穂耳命を、當時の太陽教宣教區域の中心地である九州の日向に下して、そこから朝鮮支那常世の國に宣教の道を開かしめようとしたが、忍穂耳命が須佐之男命の推舉した出雲族であつたため、高天之原では一種の不安を感じたらしく、暫くこれを中止して、忍穂耳の次男ににぎの命の成長を待つてこれを九州へ下すことにした。にぎの命の母は太陽教主と代代縁結びをする高みむすび家から來た高天之原族の正統であるから、安心して遠く九州へ遣はすことが出来たのである。

にぎの命は九州へ下つて間もなく、大山津見家から木花咲夜姫をめぐつて、日子穗穗出見命を生んだ。それが五瀬命と神武天皇の祖父にあたるのである。

太陽教主が高みむすび家以外と結婚したのは、たぶんこの時がはじめてであらう。忍穂耳命はせつかく天照大神の後継者として推舉されたが、出雲族であつたため遂に教主の職につくことが出来ず、高天之原を去つてしまつたのである。

高天之原を去つた忍穂耳命は、まづ紀伊の熊野に行つたらしい。さきに天照大神と須佐之男命とが、高天之原の後継者を定める相談をした時、天照大神が宗像三女神を推舉したに對して、須佐之男命は忍穂耳命、穗日命、天津彦根命、生津彦根命、熊野樟日命の五人を推舉したと記紀に書いてあるが、これは誤りで、双方から三人づつを推舉したと斷言出来る。それは須佐之男命が



選んだ天津彦根命と、生津彦根命とは同一神であり、熊野樟日命とは忍穗耳命のことである。熊野樟日命といふ神の名はあるが、熊野三山のどこにもこの神を祭つてゐない。のみならずこの神の後半生について記した記録がない。久米邦武博士は、たぶん若死したのであらうと云つてゐるが、その證據もない。ところが古記録によると、熊野樟日命の別名を、熊野忍踏(おしほみ)命または、熊野忍隅(おしすみ)命と云つてゐる。忍踏忍隅とは、忍穗耳の轉化であることに疑ひはない。このことから察すると、忍穗耳命は高天之原を去つて後、暫く熊野に来てゐたので、熊野おしほみの命と呼ばれたのであらう。しかし御子のにぎの命が九州へ下つたので、その後を慕つて筑前の田川郡香春に行つて、そこにしばらく住んでゐたらしい。今の縣社香春神社は、昔から知名の人たちに深く信じられてゐたことを考へると、この宮の存在はかなり大きなものであらう。熊野では忍踏命と呼ばれたが、ここでは忍骨命と呼ばれてゐたのである。それから同郡英彦山に行つて、そこで世を終られたらしい。後の官幣中社英彦山神社は、天忍骨命を主神として祭つてゐる。英彦山はもと彦山(ひこさん)と云つて、その神社には一時三千の修験者が住んでゐたこともある。忍穗耳命がこの山に住んでゐて、御子ににぎの命のためにその無事を祈つてゐたとみえ、明治天皇の即位した際は、皇室からこの神社へ、はらへのために用ふる人形(ひとがた)を賜はつて、この神社で七日間毎日祈つて、その人形を宮中へ返したのである。天皇はその人形

で身體を撫でて、それを川に流したのである。だからこれを撫物(なでもの)と云つた。これはにぎの命が父忍穗耳命から、撫物を送られた故事から來たものかも知れない。

大山津見家と結婚したにぎの命は、日子穗穗出見命を生み、日子穗穗出見命は海津見族の豊玉姫と結婚して、うがやふきあへすの命を生み、うがやふきあへすの命は再び海津見族の玉依姫と結婚して、五瀬命を生んだ。この五瀬命は父の跡をついで太陽教主となり、祖先の地大和の國に歸らうとして、河内まで來た時、四代前の先祖忍穗耳命の長男火明(ほあかり)命四世の孫にぎはや日命が、太陽教主として大和河内を治めてゐると聞き、その居住地鳥見の里に行つて談合せんと、河内から大和へ入らうとした時、にぎはや日命の部下である長すね彦が談判に來て、どちらが天照大神の正統であるかについて議論してゐるうち、長すね彦の家來の一人が、五瀬命に負傷せしめた。その傷が浅くなかつたので争ひを止めて、海路紀伊に行き、紀の河ぞひに大和へ入らうとしたが、今の和歌山縣海草郡三田村で崩じたのである。天之御中主命が第一代の太陽教教主となつて以來、十六代目の五瀬命に至つて、はじめてこの不幸を見たのである。

五瀬命まで十五代の教主はみな泰平無事の生活を送つたため、その祟りを恐れる必要がないので、神社を建ててこれを祭らなかつたが、五瀬命の不幸なる死に對して非常に同情した村人たちは、はつきり五瀬命を祭神として祭つたのが、後の官幣大社竈山神社である。



## 上賀茂下賀茂神社の由來

これまでの歴史家は神武天皇を第一代の天皇とし、太陽教第十七代の教主神武天皇といふことを避けるため、多くの假説を設けてその記事をあいまにしてゐる。日本紀によれば神武天皇が五瀬命を超えて天皇の位に即き、兄五瀬命を部下に従へて、高千穂の宮を出發したのは四十五歳の時であつたと云つてゐる。しかしこの一行が高千穂を出て、山陰山陽四國にみこと持ちを遣はし、人民を宣撫しつつ河内まで來た年数は、記紀の記事を比較すると、少くも十年前後を要してゐる。然るに五瀬命が流れ矢にあつて崩じた時、まだ結婚もしない青年であつたのを見ると、たぶん九州出發は十四五歳であつたらう。そして神武天皇は十歳以内の幼い王子であつたに相違ない。

一行が九州を出發する時、にぎの命以來代代建角身（たけづぬみ）命の名で仕へてゐた道案内の建角身命と、生母玉依姫と共に東遷の旅をつづけつつ、至る所の太陽教徒に歓迎されつつ河内まで來た時、急に形勢が不穩になつたので、五瀬命は建角身命に命じて、御母玉依姫を山城の賀茂に避難せしめ、そこで時機を待たしめ、自分は幼弟若御毛野（後の神武天皇）と共に紀伊まで行つて、そこで崩せられたのである。

若御毛野命は群臣に守られ敵難を避けて熊野浦に行き、狹野の里にゐて時の至るのを待つてゐるうち、母の玉依姫は山城で崩せられ、日吉山の西麓御蔭山に葬つたらしい。この頃から若御毛野命は狹野王子と呼ばれた。王子はその頃、せいぜい十五六歳の少年であつたらう。下賀茂神社の祭神玉依姫を建角身命の娘であるといふのは、若御毛野命十五歳立太子、四十五歳東遷出發説を辯護せんがための作爲であるといふはなげなければならない。玉依姫はうがやふきあへすの命の妃であつて神武天皇の母である。そんな人の名前を臣下である建角身命が自分の娘に命名するはずはない。そこで少しく上賀茂下賀茂兩神社の祭神を研究してみよう。

京都市にある官幣大社上賀茂別雷神社の祭神は、わきいかづちといふ、いざなみの命の死體を守つてゐた雷神の一であるといふが、それは全然信するに足りない。古來この神社の祭神について數種の説がある。それはこの神社の神主が老衰して職をゆづる時、その後任者に口傳で祭神のことを傳へ來つたので、いろいろの説が誤り傳へられたらしい。その口傳の中で上賀茂の祭神を、日子穗穗出見命とする説が正しいらしい。それから下賀茂神社の祭神は、神武天皇の御母玉依姫と、その道案内者建角身命とを祭つてあるといふのが正しいと思ふ。何となればこの神社を昔から、賀茂御祖（みおや）神社と云つてゐるのは、神武天皇の御母の神社といふ意味に相違ない。臣下の女に對して皇室が御祖神社などと尊稱するはずはない。公事根源までが賀茂御祖神社の祭



神を、建角身命の女であるなどと書き、瀬見の小川のほとりを歩いてゐると、川上から流れて来た丹塗の矢を拾つて、妊娠したなどといふ愚にもつかぬ話を支へようとするのは、もつてのほかである。丹塗の矢の傳説はこのほかにもあるが、これはその頃大和に勢力を張つてゐた賀茂、大三輪などの出雲族の貴公子が、丹塗の矢を携へて山城邊へ狩獵に来て、土地の若い女性に子を生ましめたことを、神話化したものであらう。その證據に、丹塗の矢のために生んだ子供を、大物主、事代主の系統であると云つてゐることでもわかる。

更に考ふべきことは、上賀茂下賀茂の兩社には、嵯峨天皇の弘仁元年四月から、土御門天皇の元久元年まで三百九十四年の間、三十四代の齋院を置かれてあつた。齋院は皇大神宮の齋宮と同じく、未婚清白の内親王もしくは皇女を立てて、その宮に奉仕せしむるもので、賀茂の兩社は皇大神宮について尊ばれた神社であるが、その祭神を詳かにしないのは何故であらうか。當時の皇室では石清水八幡を、第二の宗廟と稱したにかかはらず、齋院のことはなく、賀茂の兩社をその上においたのは何故であらうか。これは上賀茂の祭神が日子穗穗出見命であり、下賀茂の祭神が神武天皇の御母玉依姫であるからである。下賀茂の建角身命は同社の相殿に過ぎない。いかに忠義な家來であつたにしろ、もともと八咫鳥といふ道案内者達の頭である。その建角身命を伊勢の皇大神宮について、尊い神社であるとするはずはない。年年行はれた兩賀茂社の祭例が、六衛府

警固のもとに嚴重に行はれ、欽明天皇の時から近衛の中少將を勅使となし、山城の國司をして檢察せしめ、國家の一大事があつた時必ずこれを兩社に報告したる如き恒例を見ると、上社の祭神が日子穗穗見命であり、下社が神武天皇の御母玉依姫であることに疑ひはない。一説に、下賀茂社は神武天皇の御陵であると云つたのも、玉依姫を神武天皇の御母とする説を強めんがために生じた傳説であらう。

### 取り換へられたる神様

日本には三島と云ふ地名が十數か所ある。その中で伊豫の三島、攝津の三島、伊豆の三島が最も有名である。それは伊豫の三島に大山津見神社があり、攝津の三島に海津見家の住吉神社があり、共に日本の海運事業の守護神として崇められてゐた。

大山津見とは大山持の意で、山林の保護をすると同時に、その産物を海外に積み出すことを司つてゐたので、自然海運を司る海津見族と共同で事業をするやうになつたのである。仁徳天皇の時代に大山津見命の子孫で、百濟に永住してゐた渡しの大神と呼ばれた一族が、日本へ歸つて来た時、天皇はその祖先の由緒で、攝津の三島に居らしめたのである。渡しの大神とは海上の運輸を司る意で、神功皇后が三韓に渡られて以來、この渡しの大神は百濟で日韓貿易のことを管理し



てゐたため、渡しの大神と呼ばれたらしい。渡しとは、わたすなはち海の意味である。

大山津見の本家は出雲から薩摩に、薩摩から伊豫に、伊豫から攝津に、攝津から伊豆にその居所を移したのである。その伊豫時代から大山津見家のゐる所を三島と云つた。伊豫の三島、攝津の三島から伊豆の三島となつて行つたので、三島とは御島の意である。御島とは海島の約であるといふ説も参考すべきである。最後に伊豆の三島に來た大山津見家が、同地方に於いて生神様として尊敬されてゐたことは、その妃いこな姫を、太后と呼んでゐたことでもわかる。ここに來た大山津見の神は、一后六妃十六王子を伊豆七島に配置して住ましめたのである。その本后は七島中の神津島にゐて、阿波の神と呼ばれた阿波姫で、この神の別名をいこな姫と云つたのである。伊豆の賀茂郡白濱村にある縣社いこな姫神社は、もと白濱明神と呼んで、深谷をふさぎ、高岸を碎いて社地を造り、そこに大山津見命と社殿を並べて祭られてゐたのであるが、後に大山津見命だけが三島に移り、いこな姫は白濱の御陵と共にその地に残つて、現在まで祭られてゐるのである。そこで三島に移つた大山津見命は、いつしか事代主命と取り換へられて、今の官幣大社三島神社となつてゐるのである。この地方に多くの門弟を持つてゐた平田篤胤が、どうしたものか三島の祭神を事代主であると云つたことが、明治維新後官幣大社の社格を得る原因になつたのであらう。白濱村に祭られてゐるいこな姫は、いつのまにかその夫大山津見命が、事代主命と變じて

ゐるのを、どう思ふであらうか。

大山津見命は神津島に本后阿波姫をおき、七島を管理せしめ、大島には波浮（はぶ）姫を、式根島には國津姫を、三宅島の伊賀谷にはいがむ姫、伊豆村にはさきたま姫、坪田には岩野姫を居らしめ、八丈島にはいなばえ姫、うばひ姫を居らしめ、全島の食料品を貯藏する倉庫のある島を御庫島と云つたのである。

延喜式には伊豆の國九十二座のうちに、名神大座伊豆三島神社を明かに大山津見神と記してある。そして波浮姫、いがむ姫、いこな姫、さきたま姫、うばひ姫、國津姫、岩野姫、阿波姫の八社があり、その中で阿波姫といこな姫は名神大座に列せられてゐる。七人に對して八つの神社があるのは、いこな姫と阿波姫とが同一神であるからであらう。

延喜式の昔から三島神社の祭神は、大山津見命であり、その女木花咲夜姫を富士神社、淺間神社として伊豆に近く祭つたのであつた。それがいつのまにか、娘の木花咲夜姫が官幣大社になり、父大山津見命は行方不明となつたのである。

こんな祭神を人知れず取りかへた例は、この他にも多くあるであらう。例へば東京の神田神社が平將門を祭つてあつたにかかはらず、明治維新の際將門を境内の末社に遷し、本社を大名持、少名彦の二神としてしまつた如きその一例である。神社を國家の宗祀とした明治維新以後、政府



は全國の神社における祭神を嚴格に統一すべきであつた。

これまでの官幣神社について考へてみても、官幣大社の筆頭である上賀茂の祭神が、まづ不明であり、平野神社の祭神もその素姓がわからない。丹生川上神社、上中下三社ともその祭神が不明である。生國魂神社の生島神足島神といふのも、これは天下泰平といふ意味らしく、祭神が明かでない。香取神宮も伊波比主あるひは、ふつ主といふだけで、その本體がわからない。紀伊の熊野坐神社の祭神も、家都御子（けつみこ）などと云つて、いざなみの命であるか、須佐之男命であるか、五十猛命であるかはつきりしてゐない。殊に京都の官幣中社梅宮神社の祭神酒解神、大若子神、小若子神、酒解子神といふ四神の正體がわかりにくい。同じく出雲の國幣大社熊野神社の祭神櫛御氣野命を、須佐之男命であるといふが、それもどうであるか判断に苦しむ。三重縣阿山郡府中村の國幣中社敢國神社の祭神を、敢國津神であるといふが、その敢國津神といふ神様は全體どんな神様だか容易にわからない。千葉縣一之宮の國幣中社玉前神社の祭神も、福島縣棚倉町の都都古別神社の祭神も、都都古別神といふだけではわからない。むしろ、同縣近津村の都都古別神社の如く、味すき高彦根神とはつきりすべきである。同じ國幣中社の宮城縣鹽竈神社、及び志波彦神社の祭神も明かでない。島根縣五箇村の水若酢神社の水若酢命も、徳島縣板東町の大麻比古神社、大分縣東植田村の西寒多神社の祭神西寒多神、愛知縣樂田村の大縣神社、廣島縣平

良村の速谷神社の祭神も、國幣中社の社格に對して、もつとはつきりすべきはずである。

#### 本地垂迹説の起原

國幣小社では静岡縣一之宮の小國神社、岐阜縣宮村の水無神社、岩手縣水澤町の駒形神社、石川縣福田村の菅生石部神社、静岡縣熱海町の伊豆山神社、島根縣佐太村の佐太神社なども、單に小國神、水無神、駒形神、菅生石部神、伊豆山神、佐太大神だけではつきりしない。これらの神社はその祭神の名を明かにしてこそ、國家の宗祀と云はるべきである。それから紀伊和歌山の日前神宮、國懸神宮には日像鏡、日矛鏡を祭り、熱田神宮には草薙劍を祭り、大和の石上神社にふつのみ魂劍を祭つてゐるのは、今日の宗教學上でいふ庶物崇拜の劣等宗教と云はれても仕方がない。これらはこの鏡や劍を保護する神主があつて、その神主に對して御食（みけ）を奉り、御酒（みき）を奉つたのであるといふことを、一般に知らしめる必要がある。でなければ祭神の意義が不明瞭になる。

#### 本地垂迹説の起原

西曆五百五十二年に百濟王から、日本の皇室へ佛像經論を奉つて、欽明天皇に佛教をすすめた時、天皇は大臣達を召して御前會議を開いた。そして佛教を信じてよいかどうかとの下問があつた時、物部、中臣等の國粹派が佛教を排斥した理由は、我がみかどの天下に王たるや常に百あま



り八十神を以つて、春夏秋冬祭り拜み給ふを事となす。方今改めて隣國の神を拜みなば、恐らくは國神の怒を致さん。と云ふのであつた。これはとりもなほさず日本の神が祟りをなすといふことである。この思想は當時から今日に至るまで日本人の心に深く植ゑつけられてゐる。たとへ天皇が佛教を信じて、その心の中には日本の神社に祭られてゐる神神が、怒り祟るのではないかといふ心配がひそめられてゐたらしい。

聖武天皇は自らを、三寶の奴と云つたほど深く佛教を信じてゐたが、奈良に大佛を建立せんと計畫した時、やつぱり伊勢の皇大神宮が怒り給ふことを心配したと見え、天平十三年に僧行基に命じて、佛骨を皇大神に献せしめて、その御心を伺ふことにした。行基は伊勢に行つて神宮の南門大杉の下で、七日間持念を續けてゐると、七日目に天照大神が現はれて、實相眞如の日輪は生死の長夜を照却し、本有常住の月輪は煩惱の迷雲を燦破す。我今遭ひ難きの本願に逢ひ、渡りに舟を得たるが如し。また得難き寶珠を受けて、暗に炬を得たるが如し。師それ舍利(佛骨)を持して飯高郷に藏埋し、以つて邦家を頼め。と神託されたといふ話は、最早消しがたい強い傳説となつてゐる。天照大神がこんなことを云ふはずもなく、殊に一法師行基を、師と仰いだなど、あまりにも空空しい話である。さすがの聖武天皇もこの報告を信じ難かつたと見え、翌天平十四年十一月三日、右大臣橋諸兄を伊勢に行かせて、その實否をたださしめたが、諸兄の奉答がどん

なことであつたが、今にわからないままになつてゐる。ところが十一月十一日の夜、天皇の夢に天女が現はれて、本朝は神國なり、神明を欽迎し給ひ奉るべきなり、而して日輪は大日如來なり、本地は廬舍那佛なり、衆生はこれを悟り、まさに佛法に歸依すべきなり。と云つたのを聞いた天皇は、はじめて太陽教の信する日輪と、大日如來とが一つであることを悟り、印度の廬舍那佛すなはち大日如來が、かりに天照大神となつて日本に現はれたのであるといふ、本地垂迹の説によつて、奈良に廬舍那佛の巨像を建つことに決心したのである。これは天皇が大佛を建てる前にまづ天照大神の内諾を得たのだといふ作話である。一面から云へば當時の佛教徒が、この本地垂迹説を天皇に説いて、奈良に天照大神の本地である廬舍那佛を建てしめて、伊勢皇大神宮に代へようとしたのである。本地とは本籍のことで、垂迹とは寄留のことである。印度に本籍のある廬舍那佛が日本に寄留して、天照大神と名乗つたといふ説を、當時の佛教家は平氣で云ふことが出来たのである。

天皇は國銅を盡して大佛を建てた。しかしまだ心の中に國神の怒りを恐れるところがあつたので、宇佐八幡の應援を得ることになつた。その頃宇佐八幡の祝部に大神(おほが)杜女といふのがあつて、八幡大菩薩が新しく建立された大佛を、ぜひ拜みたいと申してゐる。と上奏したので天皇は大いに喜んで杜女を外従五位下に叙し、翌天平勝寶元年十一月に、宇佐八幡を奈良に招い



た。奈良から豊前までの道路を清掃して、八幡大菩薩の乗輿を迎へたのであつた。大神杜女は同族大神田麻呂と共に乘輿に従つて奈良に乗りこみ、十二月十八日に八幡大菩薩は新しく造つた梨原の新殿に入られ、十二月二十七日に杜女は天皇の乗輿に等しき乗物で東大寺に行き、大佛を禮拜した。これで宇佐八幡も大佛建立に賛成してくれたことになるので、天皇は大いに喜んで杜女を従四位下に、田麻呂を外従五位下に叙して、八幡大菩薩と共に宇佐に送り返したのであつた。それから五年の後天平勝寶六年十一月二十七日に孝謙天皇は、大神杜女を日向に流し、田麻呂を種子島に流した。その理由は明かでないが、杜女や田麻呂が宇佐八幡の神託と稱して偽りを云つたことが發見されたのであらう。後に和氣清麿が宇佐八幡の神託を奉答した時、天皇がこれを信じなかつた原因は、この時から起つてゐると云つてもよからう。

この宇佐八幡が奈良の大佛を拜んだことについて、當時の日本人はひそかにその神託を疑つてゐたらしい。その結果翌七年三月二十八日に、宇佐八幡は神戸一千四百、神田一百三十町歩を朝廷に返納して、神戸四百二十戸神田五十町歩にしたのであつた。その時の神託は、我はいつはりて神命を託するを願はず、請ひ取れる封千四百戸、田百三十町今所用の由なし、宜しく朝廷に奉還し、常の神田を留付すれば足れり。といふのであつた。この神託中に、請ひ取れるといふ一言がある。これはたぶん杜女や田麻呂が、でたらめな神託を奏上して、神戸神田を天皇にねだつたことを云ふのであらう。

さてこんな騒ぎをして建立した大佛の開眼式を行つたのは、天平勝寶四年四月九日であつた。大佛の大きさは、その顔の長さ一丈七尺、廣さ九尺九寸、鼻の高さ三尺、眼の長さ三尺九寸、口三尺七寸、あご一尺六寸、耳八尺五寸、眉五尺四寸五分、といふので全體が推測できる。これが天照大神の本地として、天皇はじめ百官有司庶民に禮拜されたのであるが、建立後四百二十八年の治承四年の亂に、平清盛の三男三位重衡のために焼かれて、その巨大な頭と右の手が無慘にも地上に焼け落ちてしまつた。そこで壽永二年に唐人陳和卿に頼んで、頭と右手をもとの通りにしたが、また永祿十年に松永久秀のため焼かれて、元祿五年まで百二十五年間あはれな姿となつてゐたのである。今日の大佛は天平時代のものは、胴體と蓮華座の花びら十枚ばかりであると、研究家はいふ。いづれにしてもこの奈良の大佛が本地垂迹説の起つた、最初の對象物であるといふべきである。

### 佛教徒の恐れた日本の神様

國民が悉く佛教信者となり、家毎に佛壇を設けて、毎日これを拜んではゐるが、その上に神棚が高く備へつけられてある。



一家中が佛教を信じてゐても、その家の先祖を神として祭る習慣が強く保存されてゐた。それを氏神もしくは鎮守と云つた。この神は明治維新後まで一般民家の各戸に祭られてゐたが、神社行政の結果その氏神の小さい祠を取り拂つて、一村一社の氏神にすることになつた。私の生まれた家は村の百姓家で、中産階級であつたが、それでも大きな檜の木の下に、小さい氏神を祭つてあつた。祖父が村役場の命令でそれを取り拂つて川へ流した時の光景を、今もおぼろげに覚えてゐる。これは日本の地に生まれた人間が、たとへ佛教を信じて、祖先代代の佛教渡來以前から神として祭られてゐたその靈を無視する時は、恐ろしい祟りを受けると思つたからであらう。

日本の習慣は一月元日の朝、一家の主人は必ず身を清め、服を改めて神社に参つたものである。よしや先祖の位牌を寺院に納めてあつても、決して寺参りはしなかつた。寺院の方でも遠慮して正月松の内には、檀中に禮廻りに行かなかつたものである。それはその祖先を神として祭る儀式をさまたげないためであつた。一家に死人があつた時、その儀式を佛式にする。この時神棚の前に紙をはつたり、または扇子を開いて立てたりして、佛法による葬式の有様を神に見せないやうにしたものである。

弘法大師と傳教大師とは、佛教界で最も名高い僧侶であつた。しかも支那に渡つて佛學の研究をして來た新思想家であつた。その弘法大師が紀州で高野山を開く時、まづその實地踏査を行ひ、

嵯峨天皇にその下附を願つた表文の中に、

空海少年の日、始めて山水を涉覽し、吉野より南に行く一日、更に西に向つて去る兩日程にして、平原なる幽地あり、名づけて高野山といふ。紀伊國伊都郡の南にあたり、四面高嶺にして人蹤蹊を絶つ、今想ふに上は國家のために奉じ、下は諸の修業者のために荒藪を芟夷し、いささか修禪の一院を建立せん。されども經中に誠めあり、水河池水悉くこれ國主の有なり。もし我他の許さざるものを用ひなば、すなはち盜罪を犯すものなり。加ふるに法の興廢は悉く天心に繫る。大となく小となく敢へて自由にせじ。望むらくは彼の空地を賜り、早く小願を遂げん。然らば四時勤念を以つて雨露のほどこしに答へん。

と書いてある。空海はかうして表文を奉つて、嵯峨天皇からあの高野山を無償で下賜せられたのである。

天皇の勅許を得た以上、空海は自由に高野山に入り、そこに七堂伽藍を建ててもよいのであるが、やはり日本に生まれた日本人である彼は、この高野山の地主が誰であるかを考へなければならなかつた。

この土地は天照大神の頃から最も勢力のあつた丹生津姫の神領であつた。丹生とは赤土のことである。祭神の具である陶器は皆赤土の手くじりであつて、太陽教徒が太陽神を祭る時、缺くべ



からざる重要な祭器であるが、高天之原族が日本へ上陸する以前に、この赤土を非常に要求したが、容易に手に入らなかつたらしい。それが日本上陸後渴望してゐた赤土が発見されたので、これを守護するために、賢明な一女性を選んでその任に當らしめ、名を丹生津姫と呼んだ。赤土は祭器を作るに必要なばかりか、田を開墾する時この赤土を底土の上に張らなければ、水を保つことが出来ない。溝を造つて谷川から灌漑用の水を導くにも、溝に赤土を張らなければならぬ。つまり米を作るにも、神を祭るにも赤土は最も貴重なものであつた。この赤土の保護をしなければ、農業も榮えず、宗教心も養へなかつたのである。住吉大神の底土男命、赤土男命は丹生津姫の指揮下にあつて、赤土を使用したのである。だから毎年祈年祭と新嘗祭の時、住吉神社の宮司が大和の畝火山に行き、埴採（はにとり）の式を行つて、その土で祭器を造り、祭禮を行つたものである。

丹生といふ地名は、この祭器を造る赤土を取つた所で、日本全國到る所に丹生の地名がある。播磨風土記によると、神功皇后が太陽教宣傳のために朝鮮へ渡つた時、丹生津姫神社から赤土を送つてゐる。皇后はその赤土を矛の柄に塗つて船に立てておいたらしい。これは皇后の行く朝鮮が、この赤土にめぐまれたよき地であるやうにと祈る心からであつたらう。その矛を護つてゐたのが住吉神社の神主であつた。この丹生津姫は最初大和の川上に居られたが、後に紀伊の伊都郡

奄田村（今の九度山附近）に来て、狩場大神と共に紀伊の伊都郡那賀郡有田郡日高郡名草郡の、廣い土地を司配してゐたのである。その範圍に祭つてゐる丹生神社は三十七社で、狩場大神は八社ある。その領地の四至は、

東は丹生川上に限り、南は阿帝川、南横嶺に限り、西は星川、神まがりに限り、北は吉野川に限る。

と書いてあり、紀伊の國の中心は殆ど丹生津姫の領地だったのである。その一部分の最もよい土地を空海が天皇から賜はつたのである。けれども丹生津姫のことを考へてためらつてゐる時、彼の夢に一人の貴人が現はれ、我は丹生の明神なり、この領地を喜んで奉るべし。と云つたと思つて眼がさめた。大師二十五箇條の遺言状といふものがある。その中に、丹生津姫が巫女について、我神道にあつて遺望福久なり。方今菩薩この山に来るは我の幸なり、願はくば永世我が領地を献じ、以つて仰信の情を表せん。といふ意味を書いてある。想ふに當時の丹生津姫神社の神主と、その弟狩場大神の神主とが、空海に面會してその領地に寺院を建てることを許したのであらう。今は官幣大社丹生津姫神社として世に知られた神社であるが、廣大な領地を空海にゆづつたため、丹生津姫神社は一時衰微したにちがひない。そこで清和天皇は、丹生津姫神社に従五位勳八等を授け、醍醐天皇は場狩大神に従五位を授けてこれを慰めたが、後には兩社共に正一位まで昇進せら



れたのであつた。空海も高野山を開くと同時に、丹生津姫神社を勧請して、高野山全山の鎮守としたのであつた。これはたとへ天皇の勢をもつてしても、佛教の勢力でも、その地主である日本の神をさしおいては、何事も出来なかつたといふ一つの證據である。

最澄(傳教)は空海と共に入唐した有名な佛僧であつた。彼が歸朝後皇城鎮護のため、その鬼門にあたる日吉山に延曆寺を建てて高野山に對立した大本山を設立した時も、そこに一つの憂ひがあつた。それはその日吉山が大山ぐひの命の墓地であつて、琵琶湖畔の今日まで農業で有名な農民達が、この日吉山の一部である牛尾山を、大山ぐひの命の墓地として拜んでゐたのであるから、その山上に延曆寺を建立して佛教を廣めようとする時、大山ぐひの命に對して、すまないやうな氣持とその祟りを恐れる心が、日本人であるが故にどうすることも出来ないものであつた。そこで最澄はその大山ぐひの命を日吉神社として祭り、これを延曆寺の鎮守としたのである。そして縦の三畫に横の一畫を加へ、横の三畫に縦の一畫を加へ、これを山王様として尊敬したといふその意味は、例の佛教流にむづかしい説明もあるが、要するに自分はこの山へ延曆寺を建てたが、大山ぐひの命はこの山の主であるといふ意味で、山王様と呼んだのであらうと思ふ。それほどに地主の神は佛教徒にも恐れられてゐたのである。

弘法大師が東寺に入つた時、秦伊呂具が三箇峰(みつかのみね)に祭つてあつた稻荷神社を、

東寺の鎮守としたのも、稻荷社の社木を伐つて東寺の建築材料にして、稻荷神社の怒りを買つたことを謝するためであつた。弘法大師ほどの才士であり學者であり、丹生津姫の廣大なる社領を、實に功妙なる手段で自己入寂の大道場としたほどの英雄的僧侶でも、なほ且稻荷神社を鎮守としなければ、心の平靜を保つことが出来なかつたほど、日本の神は權威があつたのである。

### 神佛の融合

佛教渡來當時はこれを蕃神として排斥した者も、時勢の流れには抵抗することが出来ず、遂にはみな佛教信者となつてしまつた。甚しきは物部氏と共に極力佛教排斥を唱へた中臣家の藤原鎌足も、佛教徒となつたばかりかその一子を入唐せしめ、彼の地で佛教の研究をさせたほどであつた。かうなれば日本國は佛教國であつて、天皇をはじめ國民全體が悉く佛教信者となつてしまつたのである。ところがそこに一つの大きな問題が國民の上に残されてゐた。それはその時代以前にこの世を去つた日本人の靈魂が、極樂にゐるか地獄におちてゐるかといふ問題であつた。願以此功德往生安樂國と祈る信者達は、佛に奉仕することによつて極樂に行かれるが、その功德を積まない者は悉く地獄におちるのである。さうすると天之御中主命も天照大神も、只一言南無阿彌陀佛を唱へたことがないので、極樂へ行けるはずがない。殊に須佐之男命の如き猛者は、何と云



つても地獄へおちてゐるに相違ない。もしさうであるとすれば、日本人は佛教を信するに大きな難關にぶつつかる。これを何とか處分しなければ佛教を日本の國民宗教とすることは容易でない。

この難問題を解決するには、まづ日本の神と佛教とを相近づける必要がある。空海は丹生津姫が佛教を喜び迎へたといふ説を、夢に託して宣傳し、行基は皇大神宮の南門に七日間も正座して、天照大神から佛教大歓迎の言葉を賜はつたなどと、天皇に上奏し、大きな佛寺には必ずその地主の神を鎮守と稱して祭るやうになつたのは、神佛両者が相調和して行けるといふことを示したものである。

神佛はどうして調和出来るか。これは當時の日本人が最も知りたかつた疑問であつたらう。そこで賢明なる當時の僧侶達は、たとへ一言の念佛を唱へないでこの世を去つた日本の神神でも、その神神に代つてお経を讀んであげるならば、神神はみな成佛すると云ひ出した。それが實行となつて延暦十三年三月五日に、宇佐八幡、宗像神社、阿蘇神社に僧侶が出張して、その祭神のためにはじめて讀經をしたのである。

清和天皇の貞觀八年二月七日に、信濃水内郡大三輪の祭神が、何事かにも不満をいだいて大いに怒つてゐるといふことを、神祇官が卜知し、直ちに僧侶達を派遣して、金剛般若經千卷、般若心經

一萬卷を讀ましめた。同月十四日に阿蘇神社の祭神が怒つてゐるといふので、神祇官がこれを奏上すると、直ちに僧侶を遣はして金剛般若經千卷、般若心經一萬卷を阿蘇神のために讀ましめた。かうして日本の神神のために讀經してその心をなぐさめてゐた結果、遂には日本の神様は、僧侶の讀むお経を非常に好むといふやうになり、別當道命が法輪寺で法華經を讀んでゐると、そこへ見知らぬ男が四人來て、熱心にその讀經を聞いてゐるので、參詣者の一人がそつとその名を聞いてみると、その一人は金峯山藏王權現であり、他の三人は熊野權現と住吉大明神と松尾大明神であると答へた。と今昔物語に書いてある。これは佛教僧侶がわざわざ出張して神社でお経を讀んでくれるだけでは満足せず、神神がご自分で出向いて行つて、讀經を聞くやうになつたといふ意味の宣傳である。かうなると日本の神を恐れてゐた佛教が、今度はあべこべに佛教が日本の神明を守るやうになつたのである。守るといふ意味は、日本の神神のために讀經して、その神神を極樂に生まれしめるといふことである。そこで日本の神社と佛教の寺院が仲よくなり、神宮寺といふものが到る所に建てられるやうになつた。伊勢大神宮にまづ神宮寺が建てられ、次いで宇佐八幡神宮寺、鹿島神宮寺、多度神宮寺、二荒山神宮寺、熱田神宮寺、賀茂神宮寺、氣比神宮寺、石上神宮寺などが建てられ、果ては美濃神宮寺、備中神宮寺、出羽神宮寺、越後神宮寺などその國の神社を一括して、神宮寺をおくやうになつた。佛教界の大學者織田得能氏は神宮寺の定義を、



寺院の境内へ神祇を祭りて鎮守と通稱するに對し、神社の地内に佛菩薩の堂宇を安置して、これを神宮寺と總稱す。と云つてゐる。この意味から察すると、全國の大なる神社には神宮寺があつて、僧侶と神職が共に祭祀を行つてゐたらしく、そこで得度といふことが行はれはじめた。神史を見ると文徳天皇の嘉祥三年五月に、度七十人とあり、その後各神社において一時に度百五十人、度二百五十人といふことが盛んに行はれてゐる。度とは、人間の生死を海にたとへ、その生死の海を渡り、彼岸に達するといふ意味で、朝廷から有徳の僧侶に命じ、佛門に入る志願者を考定して、これに度を授けるやうにしたのである。その式を得度式と云つた。これは神社と佛教が融合して多くの有力なる佛教信者を作らしめたのである。

かうしてゐるうちに神社に參ることも、寺院に參ることも同一の意義になり、果ては日本の神は悉く印度の佛が日本に垂迹して、日本の神となつてゐるのだと云ふ、本地垂迹説が唱道され、天照大神は大日如來、鹿島神は釋迦如來、香取神は藥師如來、牧岡神は地藏ぼさつ、太力男命は不動明王、熊野神は虚空藏ぼさつであるなどと云つても、國民中に誰一人これを怪しむ者がいないほどになつてしまつた。これを本地垂迹説といふのである。

### 神佛遂に融合せず

佛教の本地垂迹説によつて、日本の神は印度の佛ぼさつが、假に現はれてゐるのだといふ意味で、權現といふ名稱が出来た。山王權現、熊野權現、伊豆山權現、箱根權現、三島權現、藏王權現、九頭龍權現、金毘羅權現、東照權現、白山權現、彦山權現など多くの權現があつた。これらの權現はみな印度の本地にある佛が垂迹して、日本の神となつてゐるのであるが、その權現の本地のわからないものもある。箱根權現の本地は何といふ佛であるかわからない。徳川家康を祭つた日光東照宮は、日本の神として東照宮といへば、誰でも知つてゐるが、東照權現といふ時、家康は何といふ佛の垂迹であるか誰も知つた者が無い。けれども東照宮といひ、東照權現と云つて誰一人これを怪しむものがなかつた。これは佛教と神道との隠然たる争ひで、佛教側では努めて權現と云ひ、神道側では東照宮と云つたのである。この神佛の競争は全國到る處にあつて、容易に解決出来なかつた。常陸の鹿島郡にあつた大洗磯前藥師菩薩神社、同國那珂郡の酒列磯前藥師菩薩神社は大名持、少名彦を祭つた神社であつて延喜式には兩社とも名神大座に列してゐる。文徳天皇の時始めてこの二社を祭つたのであるが、その際神道と佛教とがその社名について、隠然相争つた形跡が藥師菩薩神社となつたのであらう。神道側では大名持少名彦といふ日本の神であること主張し、佛教側では日本に醫藥を廣めた神であるから、藥師菩薩と呼ぶことを主張した結果、兩者を融合せしめ、こんな社名にしたのであらう。然るに明治維新後神佛判然合によつて、



薬師菩薩の四字を削つて大洗磯前神社、酒列磯前神社として、明治十八年に國幣中社に列したのであつた。

延喜式に現はれた日本神社の社格は、名神大、大、小の三等であり、これは名神大座、大座、小座の略で、名神大社、大社、小社とも云ふべきもので、後の官幣大中小社と同じことである。後にこの名神大を大明神または明神といふやうになつた。そこで日本中には津津浦浦にある神社を、權現様、明神様といふやうになつた。權現様とは佛教の呼び方であつて、明神様とは日本古來の神道の呼び方である。一般民衆はこの區別を意識せず、一つの神社をあるものは權現様といひ、あるものは明神様といふ。權現様と呼ばれる村の氏神に、祭日に立てるのほりには、飛鳥大明神または飛鳥大權現などと染め抜いた大きなのほりが、平氣で風にはためいて立つてゐる。參詣者はこれを見て少しも意に介しないのは、神佛がすっかり融合してゐるやうに見えるが、實は神道と佛教の反目が、無意識に表現されてゐたのである。

日本が佛教國となつて以來、どんなに小さい村にでも必ず佛教寺院があつた。殊に徳川氏が政權を握つて以來、キリスト教禁止のため日本人の葬式は必ず佛式にすべき法令を定めたので、日本人は佛教と離るべからざる關係を持つやうになつた。本居宣長、平田篤胤の如き排佛家でも、その葬式は佛式であつて、佛教僧侶の引導によつて往生極樂を得る形式をとつたのであつた。その習慣が昭和時代までつづき、太平洋戦争の戦死者中に、キリスト信者があつても、それはキリスト教式で葬式を行ふことを禁ぜられてゐた。最早信仰の自由が憲法で認められた後でも、死者の埋葬認許は寺院から出すやうになつてゐた。

これだけ佛教が全權を握つても、津津浦浦の神社は決して消滅しなかつた。村村に寺院が建立されると同時に、村村に氏神の社が設けられた。この社は寺院の數倍數十倍にのぼる多數のものであつた。日本人の死者は悉く佛僧の手で葬られたが、日本人のすべては生後百日または三十三日あるひは三十一日目に、必ず宮參りをしてその出生を氏神に報告したものである。それから三歳五歳七歳になつた時は、その子供を盛装させて神社に詣でさせたが、決して寺院へは行かなかつた。

一月一日になると日本中の家家では、氏神に參拜し、まづ神明に幸福を祈つた後、親戚知友が互ひに慶賀したものである。この時佛教僧侶は自ら遠慮して、決して檀中へ年禮に出かけず、松の内を過ぎて始めて寺から檀中へ年禮に廻つたものである。これは村村にある寺院の勢力が、その村の氏神よりも下にあつたことを物語るものである。

氏神とは氏上であつて、昔はめいめいの祖先の墓を拜んでゐたのであるが、年久しく墓地の存在が不明になつた時、村民全體が相談して一神社内に、村中の家家の祖先を招待して、村民全體



でこれを祭つたのである。その祭りは謂ふところの神人共食で、各自が海のもの山の物田畑の物を持ち寄つて、神社の境内で一大宴會を催したものである。その時ひもろぎを立て、そこへいろいろの品物を供へたのである。これを幣と云つた。

この氏神祭りは村民達の祖先を祭るので他國から移住した者には何の關係もないのである。どんなににぎやかな祭禮であつても、そこを通り合はせた旅人にはその祭禮に列する資格がないのである。それと同じく一年二年の歳月をその地に過ごしても、自分の祖先を祭つてゐない氏神とは、何の關はりもないので、參詣する必要もなく、またその仲間入りが出来なかつたのである。けれどもその地に生まれ、そこで育つた者はその氏神を、うぶすな(生土)と云つて祭禮の仲間に入れてもらふことが出来たのである。生土(うぶすな)とは生まれた土地の神といふことで、氏神とは意味が違ふのである。東京の日枝神社は東京市民の生土である。昔から東京に住んでゐた人達でも、大山ぐひの命と何の關係もない者は、この宮を氏神とは云はず、生土と云つたのである。だから生土は氏神よりも廣い意味の守護神である。明治時代までの日本人は、幼兒の頃その髪を剃つても、必ずぼんのくぼに少しばかりの長い髪を残しておいたものである。それはその子供がつまづいて倒れようとした時に生土神がその毛を捉へて倒れないやうにしてくれると信じてゐたからである。後には着物の襟肩のところに長方形の布片を縫ひつける習慣もあつた。かくし

て日本人が日本の神に頼る心は、實に強いものがあつた。

神佛は殆ど融合したやうに見えたが、どこかに一致しない點があつた。佛教は八萬四千の法門を有する深い哲學である。けれども日本の最初から日本人に教へこんだ太陽教の信仰を、日本人の心から取り除いてしまふことは遂に出来なかつた。さうしてゐるうちに徳川の幕末に、本居宣長、平田篤胤らの古道學者が現はれ、猛烈に佛教を非難し、神道をもつて日本の宗教となす大運動を起したが、その實現を見ずして彼等はこの世を去り、皆佛式で葬られたのであつた。然るに徳川幕府は遂に崩壊し、明治維新となるや古道學派の平田鐵胤とその子延胤が宮中に入つて、明治天皇の侍講となり、古道學者が多く明治政府に入つて、神道のために氣を吐き、遂に佛教を皇室から除き去り、神道を以つて皇室の宗教とした上、日本人全體を神道一本の宗教にしてしまふ計畫を立てた。そしてまづ神社は國家の宗祀なり、と云ふ方針を定めた。これは佛教、キリスト教は日本人の信すべきものでない。日本人は神社のみを拜んでゐればよいと云ふ意味の命令であつた。この時思ひきつて皇大神宮は日本の宗社であつて、すべての神社はその末社であるとする英斷がなかつたため、國家の宗祀の意味があいまいになり、依然神佛相對待する有様になつた。そこへキリスト教が介入して、日本の宗教は四分五裂の有様となつた。そして今の人達には神と佛との區別がはつきりして來た。要するに日本の神と印度の佛とは、遂に融合一致出来なかつた



のである。

### 國家神道神社神道の結末

前述の如く佛教寺院がどんな山間僻地にでも、必ず存在するやうになつたが、それでも神社の数は寺院の數倍に達するほど多く建てられた。人皇六十代醍醐天皇の延喜五年から延長五年まで二十二年の歳月を費して調査した延喜式によると、祭神三千一百三十二座を、二千八百六十一社に祭つてあつた。けれどもこれは名神大座から名神小座までの名高い神社であつた。この他名神の列に入らない小さい神社は、何萬何十萬にのぼつたであらう。これらの神社は佛教の勢力でも、どうすることも出来ない強いものであつた。

佛教が渡來して以後、この佛教の教を佛道と云つたのに對して、神社の教を神道と云つた。この神道は佛教の如き深い教理も哲學もなかつたが、單純なる太陽教の意味は、國民の間に強い勢力を持つてゐた。その理由は太陽教主すなはち後の天皇は、太陽神が人間の形を取つた現人神であると信じてゐたから、國民に對して絶對の權威をもつてゐた。これを今日の言葉で云へば、國家神道といふべきもので、いやしくも日本國民たる者は、この太陽教主を神としてその命令に絶對服従しなければならなかつた。それと同時にこの太陽教主を一言一行も、これを批評する資

格は國民になかつたのである。天皇は太陽である。その太陽は地上に雨を與へず、草木が枯れつくすほどの日でりを與へても、長雨がつづいてノアの洪水ほどの大事件が起つても、これを非難することは出来なかつたのである。それと同様に雄略天皇がどんなに殺伐であつても、この帝は悪人なり、人を殺すを以つて業となす。と史上に明記せられたほどの武烈天皇に對しても、この天皇が絶對の權威を持つ太陽教主であるが故に、時の國民は一言半句も恨まず、悲しまなかつたのである。それは國民全體が、太陽が一時光を放たない日蝕になつたのだと思ふ程度ですましたものである。この太陽教主に對する尊敬は、いかに佛教が皇室を占領しても、決して消え去らなかつた。孝謙天皇は剃髮の尼僧で、二度目の即位式をしたが、やはり古來の神式に従はれたのであつた。その後歴代の天皇が即位式を行ふ時は、全國の寺院に命令して鐘を鳴らさしめなかつたのであつた。だから國民は手を合はせて佛像を拜すると同時に、神社に對しても合掌を忘れなかつたのである。全國到る所に建てられた神社の前を通行する者は、必ず禮拜を怠らなかつたが、名ある人はその神社に幣(ぬさ)を奉つたものである。然るに長い道中には幾十幾百の神社があるので、一一幣物を捧げることが出来ないから、幣袋といふ袋の中に、青赤白などの小さい布片を入れて持つてゐた。そしてその小片を少しづつ神社に捧げて、ぬさの代りにしたものであつた。



菅原道眞が宇多天皇のお供をして奈良に行つた時、東大寺の鎮守手向山八幡の社前を通つたが、幣袋を用意してゐなかつたので、

このたびは幣も取りあへず手向山

紅葉のにしき神のまにまに

といふ和歌を詠んだ。その意味は、この度は天皇に隨行して來たので、自分勝手に神社に參ることが出来ないから、幣袋の用意をして來なかつた。だから幣を奉りたいがそれが出来ない。けれども今涼しい秋風が深紅な楓の葉をちらちらと吹き散らしてゐる。どうぞこれを神様のお作りになつた幣だと思つて、お許し下さい、といふのである。

昔は山の頂を國境または村境としてゐた。境とは坂合の意で、その時には必ず小さい神社があつた。それは坂の兩方を守る神を祭つてあるので、どちらから登つて來た人でも、そこでこの鎮守神に幣を手向けたものである。峠とは手向けの意味である。

こんな神社が多かつたので、教理も哲學も持たない神道が、佛教に對抗し得たのである。さてこの神道は、國家神道、神社神道、宗派神道の三つに分れてゐた。

國家神道とは國家と切り離すことの出来ない神道で、太陽すなはち太陽教主を信じてその命令に服従することである。この信仰は崇神天皇の時まで續いたが、崇神天皇が同殿同床の天照大神

を、宮城以外に祭つた、その時が國家神道と神社神道の分れる最初であつた。天照大神は過去の太陽教主で、崇神天皇はその當時の太陽教主であつた。たとへ教主であつても、死して隠り身となつた以上、その隠身は大國主命の配下に屬さなければならなかつた。その隠り身である天照大神と崇神天皇とが、同室内にゐる時、どうしても崇神天皇が主として祭られる現人神であり、天照大神はその相殿である。つまり同居人に對して主人が別居を申出たのである。そして天照大神は伊勢神宮に祭られ、皇居と神宮の別がはつきりした。この國家神道は昭和二十一年一月一日まで存續して、強い權威を持つてゐたのである。ところが明治維新後、皇室と神社神道とが固く結び、皇室はあらゆる神社の總本家の形となり、國家神道と神社神道との區別がなくなつた。その代り天理教、金光教などの十三派の宗派神道が起り、國家神道神社神道とひそかに對立する形になつた。

明治二十七年に日本は清國と戰つて勝利を得た。これは日本が太陽教主の天皇を戴いてゐるためであると、國民は一致して信じてゐた。ついで明治三十七年に日本は世界の六分の一を占めてゐる大國ロシアと戰つて、再び勝利を得た。この戦で日本軍は銃劔の勝利は得たが、戦後敗戦國のロシアから猛烈な思想を日本へ持ちこんで來た。その應援はドイツ、フランス、スカンデナヴィヤ諸國で、これらの數個國から日本に送つて來たナチュラリズム(自然主義)ソーシヤリズム



(社會主義)ニヒリズム(虛無主義)アナキズム(無政府主義)コンミニズム(共產主義)などの思想は、小説となり論文となつて全國民に接近して來た。これはまさに日本開闢以來の大事件であつた。これを如何にすればよきか、といふ問題は、政府當局者が責任をもつて解決すべき義務があつた。そこで政府當局者は額を集めて協議した結果、國家神道、神社神道を復活するところが最上策であるとしてその實行に着手した。その第一は天皇を昔ながらの太陽教主として、神聖犯すべからざるものと信ぜしめることであつた。ある年の文官高等試験委員をしてゐた某博士は學生に對して、天皇が親を殺せと命じた時に従ふべきか否やといふ問題を學生に與へたことがあつた。また文學博士法學博士の二つの學位を持つてゐる某男爵は、瞑想的宇宙觀といふ一書を現はして、日本國と外國とが戰端を開いた時、外國の主張が正義であり、日本の主張が不義であつた時、平常正義を唱道するキリスト教信者は、正義について不義の祖國を攻撃するや否やといふ問題を提供したことがあつた。知識階級にはこんな學者達が論陣をはつて國家神道を鼓吹すると同時に、一般青年に對しては全國の神社に參拜せしめ、その祭禮を盛んにすることによつて外來思想を防止しようと計つた。そこで全國の小學生徒は年祈祭り、紀元節、天長節には教師につれられて氏神に參拜しなければならなくなつた。青年達は市町村長の命令で祭禮に参加し、のほりを立て太鼓をたたき笛を吹き、みこしをかついで賑かに祭禮を行つたのである。しかもみ

こしが通過する時、一階から見下すやうなことがあつたならば、警官が踏みこんでこれを引きずり下した例もあつた。村長はこの祭禮の祭主となり、あたかも昔の將軍が通行する時、目張りをさせたのと同じ形式を取つたのであつた。ところがかうして祭典を盛んにしてみると、神社が多すぎる。明治三十九年末の調査では全國の神社數十九萬二百六十五であつた。これだけの神社に有資格の神職をおき、村民を思想的に教導して眞の日本精神を復活せしむるためには、その指導精神を持つ神職を、一社に一人づつおかなければならない。けれどもそれはとうてい不可能事であつた。そこで日本の神社行政は、この神社の數を減じ、一社に一人の神職をおき、これを判任待遇として相當の月給を支拂はしめることにした。その結果明治四十年末には神社數四萬を減じて、十五萬二千となつた。更にこの神社合併を勵行して、明治四十一年末には十一萬七千八百十八社になつた。しかしこの神社合併によつて、いろいろな弊害が生じて來た。祖先代拜んで來た神社を、その中の一番大きい神社に合併せられる時、氏子達がこれに反對するのは當然のことであつた。一村に稻荷神社と八幡神社と金刀比羅神社と天満宮の四社があつて、それを八幡神社に合併しようとしても、他の三社が承知しないので、幾度か村會を開いた結果、稻八金天神社といふ名にして、合併を承認させたといふ話がある。かうして稻八金天神社が祭られてゐる時、年を経るに従つてその神社の祭神が氏子達にもわからなくなつてしまふ恐れがある。そんなことが



あちらこちらに起つて来て、いつのまにかこの神社合併の勵行も下火になつてしまつたのである。さうしてゐるうちに外來思想はますます強く日本人の心を支配するやうになつた。

明治四十一年七月に西園寺公望、原敬等の内閣にとつて代つた第二次桂内閣は、總理大臣、大藏大臣の二相を陸軍大將桂太郎が兼任し、司法大臣には岡部長職、文部大臣には小松原英太郎が當り、陸軍大將山縣有朋の後援する長州閥内閣を作り、強硬なる國家神道を斷行することとなり、遂に明治四十三年六月の千九百十年事件に、急進主義者二十四名に死刑の宣告をして、その半数を特赦無期懲役とし、半数を死刑に處した。これは今日から見ると亂暴極まる非立憲的の裁判であつたが、日本人の誰一人これを非難するものがなかつたのは、實に神社行政の結果であつた。この事件以後、小學兒童の氏神參拜がますます嚴格になり、敬神愛國の思想が強く鼓吹されるに至つた。その後大正昭和にかけて、いふところの國家神道は、神社神道となつて日本の思想界は、伊勢神宮を中心として統一する形式となつてしまつた。

日本歴史の二大古典である日本書紀と古事記の二書のうち、古事記を排斥し、日本歴史は日本書紀によるべきものといふ思想を主張したのは宮内省内務省文部省軍部であつた。それは古事記の卷頭が天之御中主神から書き始められ、日本書紀は國常立命から説きはじめてゐるからである。そして日本書紀は天照大神を中心として論ずるに便利であり、古事記はあくまでも天之御中主命

を中心とするため、天照大神は歴史中の一時代統治者にすぎない。

當時の爲政者は新しく神社神道を日本に發達せしむるため、あくまでも伊勢の皇大神宮中心の神社行政を行はふとしたのである。それがため天照大神を萬物の創造主となし、日本人のみならず全世界の人人すべてが、天照大神を神として禮拜すべく、その子孫である天皇を世界の天皇とすべきだといふ思想が、日本の爲政者から強く宣傳されはじめたのである。これがために古事記派の學者は、その言動を束縛されるに至つた。ここに於いて頭山滿氏今泉定助氏等五名から、神祇院に御伺書といふものを提出した。その文中に、邦家再興の古典たる古事記を以つて神典とし、日本民族本來の信仰傳承なりとして講述せる著書の多数が、發行禁止の處分を受け居る有様は、青年子弟の教養上最も速かに解決を要する問題である、といふ意味が書かれてあつた。そしてその御伺事項といふのは左の通りであつた。

第一問、古事記を以つて非議すべからざる皇國の神典なりと解すべきや、或ひは支那思想を以つて記述せられたる書籍なるが故に、國體違反の點を含むものと解すべきや。

第二問、古事記冒頭の天地創成の傳承は日本民族の信仰なりや、或ひは支那傳來の信仰なるや。

第三問、天之御中主神を否定し、或ひは輕視する處論の如きものこそ、神典冒瀆の説として禁絶すべきものにはこれ無く候や。



第四問、天照大神は一日本民族國家の中心主宰神に坐しますのみならず、同時に全世界人類宇宙の中心主宰神にましますといふ信仰を是認すべきや否定すべきや。

第五問、日本天皇は一日本民族國の中心にましますのみならず、本來的に全世界人類宇宙の天皇にましますといふ信仰を、是認すべきや否定すべきや。

といふのであつた。

これに對して大日本神祇會から送つた回答は、

第一、古事記は皇國の神典と解すべきものと存じ候。

第二、古事記天地創成の傳承は日本民族の信仰と相信じ居り候。

第三、以上の所見に基き自ら明白なるべしと存じ候。

第四、天照大神の御神威、全世界人類の上に光被し給ひ、仰いで以つて宇宙人類の中心主宰神たるの信仰に到達するは、無論是認すべきものと存じ候。

第五、恐れ多くも天皇の御本質を奉拜するとき、前項の所見に基き論議の餘地なかるべしと存じ候。

といふのであつた。これが當時の爲政者を代表した回答でありとするならば、古事記を排斥するのは行き過ぎであるが、天照大神が宇宙の主宰神であるといふ思想と、天皇が世界の天皇である

といふ思想とは、公然承認されたのである。だから天照大神を宇宙の主宰神と仰がない佛教もキリスト教も、壓迫を受けざるを得なくなつたのである。

この頃から皇大神宮の參詣者が目立つて多くなり、日支事變、太平洋戦争の起つた時は、出征軍人は悉く氏神に參詣し、その守り札をいただいて入營したのである。戦時中全國の神社は日夜戦勝祈願に餘念なく、有名なる神社の大太鼓の音を、ラジオによつて全國民に聞かせたり、神社前を通行する者には、悉く脱帽敬禮せしめ、電車が東京市内を通過する時、靖國神社前、宮城前では乗客一同に脱帽敬禮せしむるに至つた。それは日本の宗教を神社中心とする豫備實行であつた。日本開關以來この時ほど神社神道が、國家神道と一致した時代はなかつたのである。と同時に國家神道とは現人神たる天皇崇拜であり、神社神道とは皇大神宮その他のあらゆる神社を、國民の信仰對象とすることであつた。そして日本軍の占領した土地には、まづ神社を建て、天照大神を拜ませたのである。だから皇大神宮の分社が建てられた所すなはち日本の領地であるといふ信念で、戦争は續けられたのである。然るに太平洋戦争が終結すると同時に、國家神道も神社神道もみな解散され、以前神社神道より一段低く見られてゐた宗派神道が、神社神道と同じ位置にゐることとなり大神宮、神宮、宮の特殊資格は廢止され、官幣國幣別格官幣府社縣社郷社村社の社格も撤廢され、皇大神宮も一氏神も同資格として見られ、在來の神社神道は跡かたもなく抹殺



されてしまつたのである。つまり神社崇拜は國家の權威をかさに着ず、各自の信仰に従つて自由に参拜せよと云ふのである。古來神祇官を以つて各省の第一に置いてゐた日本の神社行政も、ここに一段落を見たのである。そこで昭和二十一年一月に、天皇は、朕は現つ神にあらず、と天下に明言せられたのであつた。それは長く續いて來た太陽教の教主たる資格を、天皇自ら放棄されたのであり、天皇は日本國の政治に參與する一人であつて、決して世界の天皇たらんとする野心をいだく者でないといふことを、世界に告げられたのである。かくして長い歴史を持つた太陽教は終りを告げたが、その太陽教徒が建てた神社は決して亡びない。のみならずますます多くなる傾向を見せてゐる。

### 神社会併と粘菌騒動

南方熊楠氏は世界に名高い學者であつた。二十一歳の時英國神智學會へ、天文に關する論文を發表して、海外の學會に知られた學者で、英、佛、獨、西、印、數ヶ國の外國語に通じ、佛教の經典にも通じてゐる、驚くべき博學者であつたが、英京ロンドンから郷里和歌山縣に歸つて以來、森林中に立てこもり、上松蔘（しげる）氏等を指導して粘菌の研究に専念した。さうしてゐるうちに今の田邊市附近に粘菌の最も多くあることを知つて、田邊に居住することとなり、そこで採

集した粘菌は、主として大英博物館（ブリチッシュ・ミュージアム）の粘菌部にそれを送つて、そこに勤務してゐるアーサー・リスター博士とその娘グリエルマ・リスター女史と共に、粘菌の研究を續けてゐたが、明治四十年の頃毎年粘菌採集に行つてゐた、田邊市外の稻成村糸田の吉日神社に行つてみると、社林は悉く伐採され、神社の跡方もなくなつてゐたので、更に田邊市の鬮雞神社の裏にあたる、くらがり谷といふ晝なほ暗き社林に行つてみると、そこにも一木を残さず見事に伐り拂はれてゐた。

縣廳の社寺課では單に内務省の指令に従つて、神社会併を斷行して、その成績を報告すればよいのであるが、南方氏にとつてはその社林の社木を悉く伐り拂ふことは、學界にも影響する大問題であるとして、神社会併取り止めの運動に着手した。そして雑誌日本及び日本人、山岳などに投書し、木村駿吉、松村任三氏等に書簡を送り、その目的を達成するやう賛助を依頼してゐたが、容易にその希望は達せられなかつた。

南方氏は和歌山市の造酒家の息子で、有名な豪酒家であつた。だから和歌山縣廳の社寺課が、縣内の神社を合併し、その社林をまる裸にしたことを非常に憤慨し、酔に乗じてこの問題を大聲叱呼しつつ論じたものであつた。明治四十四年八月十五日に、同氏は田邊中學校の校堂で、和歌山縣學務部社寺課の主任田村和夫氏が、社寺に關する講習會を開いてゐると聞き、黙視するに忍



びす、一杯機嫌でその會場に乗りこみ、田村縣屬を面罵して講習を妨げたため、警官に引致され、家宅侵入罪の罪名で和歌山監獄田邊分監へ、十八日間未決囚として收監されたが、裁判所では審議の結果無罪となり、十九日目の朝放免せられることになった。ところがこの十八日間は南方氏にとつて、少しも豫期しなかつた禁酒週間で、一滴も酒を口にしなかつたため、非常に意識が明確になり、こんなよい所があるとは氣付かなかつた、今少し此處において欲しいと云つて、留置所を出ようとしなかつた。これには役人達も手のつけようがなく、さんざん頭を下げて漸くに出てもらつたのであつた。南方氏の親友に眞言宗高野山大學で勉強した僧侶くすれの毛利清雅といふ新聞社長があつた。一説にはこの毛利清雅に頼んで留置所を出てもらふやうに、役人達が骨を折つたのだと云ふが、たしかなことはわからない。しかし、とにかく南方氏は十九日目で自宅に歸つたのである。その後も南方氏は神社合併の反對を唱へてゐたが、大正七年三月六日に知人へ送つた手紙の中に、四五日前貴族院で江木千之、高木兼寛、石黒男等が絶対に神社合併廢止の儀申出候、その主旨は小生が九年前に云つたところの一部分に有之云云、と書いてあつた。南方氏は十年間の主張が漸く認められたことを、喜んだものと見える。それから十數年の後、毛利清雅氏は田邊町の助役となり、町費減額について意見を町會に提出したが、町民の一部にその方法が不當であるとして、やかましい議論をする者があつた。そこで毛利氏は一策を案じ、鬮雞神社の

例祭の日、拜殿の前に集合してゐる町民に聞えるやう、大聲をはり上げて町政に關する自己の意見を、祝詞（のりと）に書いてこれを朗朗と讀み上げた。町民達は未だ聞いたことのない神職以外の助役の讀み上げるのりとを聞いて驚いてしまった。これは別に法律上の問題にもならず、單に町民の間に毛利氏の施政に關する議論が、やかましいだけであつた。然るに神職間に一つの問題が起つた。それは神職以外の者に勝手にのりとを上げられては、神職の職域が犯されるといふのであつた。で、郡内の神職會から縣の社寺課へその善處方を願ひ出た。

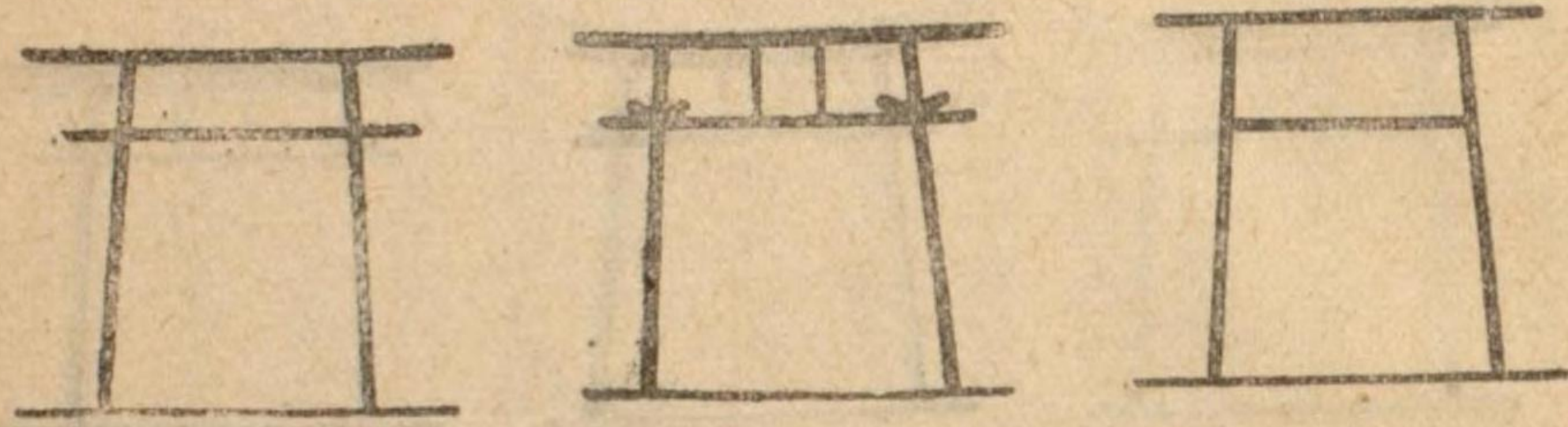
縣でも事件がさほど大した問題でもないで、若い吏員を田邊に遣はしてその解決を計らせた。しかしその吏員もこの問題をどうすればよいか、その方法がわからないので、田邊町内に住んでゐる最も學識の深い南方熊楠氏に相談して、解決しようと思ひ、その宅を訪問すると、南方氏は快く面會してその來意を聞いた。すると吏員はのりと問題を詳しく述べて、これが學術的解釋を願つたところ、南方氏は即座に、日本ののりとは、佛教、殊に眞言宗弘法大師との關係が深い。町役場にゐる助役の毛利清雅は、高野山大學林出身であるから、のりとのことならあの男に相談するがよい。と云つたので、若い吏員はそのまますぐと引退つたといふ話が傳へられてゐる。

## 日本神社の設備



神を迎へて祭りを行ふために、まづ社を定める。そして岩境（いはさか）を設け、境木（さかき）を植ゑ、しめ繩を張り、南向に社殿を建てる。そして境木で造つたひもろぎを立てる。ひもろぎとはいろいろの説明があるが、結局御守木で、見守り木の轉であると思ふ。日本の神社には偶像がない。けれどもこのひもろぎは危うくして偶像にならうとした原始的偶像の一つである。それは人間の立つた姿に似た常緑木の上方に鏡を掛けた。それが人間の顔である。鏡の下にまが玉を掛けた。それは首飾りである。その下に劍を掛けた。これは佩劍である。これはたぶん祖先の靈を祭る時、まが玉を首にかけ、草薙の劍を腰におびた祖先を思ひ出すために立てた、一種の偶像であつたらう。

このひもろぎを立ててその前に山の物海の物などを供へて、祭りをしたのであるが、そのほかに麻緒または布類を捧げた。けれども山の物も海の物も麻類も持たぬ人は、家に飼つてある雞を、ぬきとして捧げた。その雞は鳥屋を造つてやらなければ、すぐに狐にとられてしまふ。そこでその雞をとまらせるために造つたのが、今日いふところの鳥居である。これは神社のある所には必ず附屬するもので、支那の華表牌門などは違つた成立である。氏神に敬意を表して、にぎてとして奉られた雞は、今日のやうにすぐ首を締められて、酒の肴にせられるといふ憂ひのない頃であつたから、静かな宮の境内で毎日神主に愛されて遊んでゐたが、安全な止り場として



鳥居も一緒に献納されたのであらう。だから鳥居の一番上の横木を、笠木といふ。それは雞がとまつてゐても雨に濡れないやうにした屋根である。その下に横たはつてゐるのを、今では貫（ぬき）と云つてゐるが、實はこの二番目の横木が本當の鳥居なのである。この鳥居は雞を止まらせるために立てたのであるから、神社の境内のどこに立ててもよかつたのである。それがいつのまにか神社の門のやうになつてしまつて、今ではいろいろな形になつてゐる。その變遷のあらましをいへば、最も簡單なのは神明鳥居である。これは皇大神宮の鳥居で、笠木の下貫の兩端が柱の外に出てゐない。次に少しく形の變つた靖國鳥居または御陵鳥居といふのは、笠木の下貫の横木が四角である。次に笠木の下貫が少しく短くてその兩端が柱を貫いてゐるのを、鹿島鳥居といふ。この鹿島鳥居と殆ど同形で、柱の兩方貫の上部に左右二本づつのくさびがあり、中央に額束のあるのを、宗忠鳥居といふ。額束とは神社名を書いた額面を掲げるための柱である。宗忠鳥居と同じ形であるが、その笠木の上いま一本少しく長い笠木が重なつてゐるのを、八幡鳥居といふ。この二重になつた笠木の下貫を鳥木とい





ふ。この八幡鳥居の二重の笠木は水平であるが、それが少しく反轉してゐるのを明神鳥居といふ。

明神鳥居と同じ形で、柱と島木との間に臺輪を置いてあるのを、臺輪鳥居といふ。これらの鳥居の柱は、靖國鳥居を除くほかは皆、柱の下部を少しく兩方に開かせてある。それは柱の直徑の二分の一を開くのであつて、これを轉びと云ふ。

これらの鳥居が神社の門になつて以來、それが種種の形に變じてゐる。鳥居の材料は最初は木材のみであつたが、後には銅を用ひたり、石を用ひたり、コンクリートを用ひるやうになつた。別格官幣大社湊川神社には、高さ十二メートル四十二センチ、笠木十七メートル九十六センチ、貫八メートル十八センチ、總重量三百トンといふ偉大な石造鳥居が建てられたのは、昭和十二年十二月十二日であつた。これは東京市高輪北町の山下太郎氏が、岡山縣小田郡北木島から伐り出した石材で造つたもので、荒木貞夫、水野練太郎、松岡洋右氏等が參列して建立式を行つたのであつたが、建立されて九箇月目の昭和十三年八月三十日午後六時二十九分に、大音響と共に

に地上に崩れ落ち、聳え立つ日本一楠社の大鳥居と云つて、神戸名物の一つであつたこの大鳥居は、瞬間にして崩れ去つたのである。これについての詳しい記事は、津村勇氏著鳥居考の五百二十九頁から五百三十四頁まで、六頁を費して詳記されてゐる。

神社の設備には鳥居について、こま犬がある。これは朝鮮から渡つて來た想像の動物であるから、高麗犬といふのである。こま犬の形は元來青色で、一角だつたので、宮中の賢聖障子に、獅子と並べて書かれてゐたのが、後には彫刻となり、犬と獅子とが一對となつたらしい。それが後には雌雄の獅子になつて神社の門に据ゑられたのである。俗にこれを唐獅子と云つた。何故この獅子が神社の門に据ゑてあるかといふに、これは犬はよく門を守り獅子は百獸の王と云はれるから、惡魔除けに据ゑられたのである。最初は獅子が左にこま犬が右に据ゑられてゐたのであるが、後には獅子の顔が犬のやうに短くなり、今日のやうなこま犬の雌雄になつてしまつたのである。このこま犬の一つが口を開け、一つが口を閉ぢてゐるのは、寺院の門にある仁王像の一つは口を開き、一つは口を閉ぢてゐるアウンをまねたものらしい。アウンとは佛教の祈禱札の上に書いてある「ハ」である。

こま犬の次に燈籠がある。燈籠の屋根を笠と云ひ、笠の下を火袋といふ。火袋の火をつける口を火口と云ひ、火袋を乗せた臺を中臺、中臺を支へてゐる柱を竿石、竿石ののつかつてゐる臺石



を沓石といふ。火口の兩方にある窓をほあかり（火明）または、あかり穴と云ふ。この石燈籠も鐵燈籠になり、銅燈籠にもなつてゐるが、石燈籠が普通である。元來日本の神様に燈明をあげるといふ思想はない。これは本地垂迹説の持ち込み品であるから、神社とは神佛判然實行の際、引離すべきはずであつたのが、梵鐘は持ち去られたが、燈籠だけは居残つたのである。

釋迦在世の頃一人の僧侶が、夏の夜火を焚いて明りをとつた。ところが火を焚くと虫が集まつて來て焼け死ぬ。それは殺生罪になるので、釋迦に相談すると釋迦が、この燈籠の造り方を教へたのであつたが、それが支那を通つて日本へ渡つて來たのである。だから小さい神社にはこま犬も燈籠もないが、國産の鳥居だけは必ずある。甚しきは社殿はなくても、鳥居だけでやしろの存在を示す所もある。

### 日本古來の宗教政策

紀伊は神代の頃から出雲族の領地であつた。けれども崇神天皇が天照大神の御陵を求めて、そこに神社を建て、神器を納めんとした時、八咫鏡以前に造つた日像、日矛の二鏡を、名草郡に止めて、日前國懸兩神宮として祭つたが、高天之原族の神社と出雲族の神社との勢力は、出雲族がはるかにその上にあつた。景行天皇がこれを憂ひて、親ら紀伊に行き、日前國懸兩宮を親祭して

高天之原族の威嚴を高めようとしたが、神祇官が占つた結果、不吉であるといふので武勇心命（たけをんち）を遣はしてこれを祭らしめた。武勇心命は日前國懸兩宮を守つて、數年間滯留してゐるうち、國造紀氏の娘を娶り、その間に生まれたのが武内宿禰であつた。

神祇官が何故景行天皇の行幸を諫止したかといふに、當時の紀伊には出雲族の勢力が非常に強かつたためであらう。神祇官の名が現はれたのは、この頃からであつて、大寶令以前から存在してゐたのである。官政が定まつた時太政官の上にあつて、巫祝、龜卜、社領、社人を司つてゐた。官名には、伯、副、祐、史、の四等があつて、後にはその官長を神祇伯と云つた。中臣鎌足も皇極天皇の三年正月に神祇伯に拜せられたが、固辭して受けなかつたことがある。その後花山天皇の皇子清仁親王が神祇伯となつて以來、代代その職をついだのである。神祇伯に任命されると同時に、王の稱號を有したのである。位は正四位下で祿は三百石であつた。

神祇官は全國の神社及び神職を總轄した役所で、太政官の上にあつたため、明治維新後も太政官の上列してゐたが、明治四年に神祇省と改め、各省と共に太政官の下に列することとなつた。玄蕃寮は、まれびとつかさとも云つて、外國人の接待をする所でもあつたが、佛教に深い關係を持ち、毎年正月八日から十四日まで大極殿で最勝經の講讀をなし、眞言院で眞言法を執行し、治部省内で大元帥法を行つた。これは大元の法と讀む習慣であつた。四月の六七兩日大安寺に百



五十人の僧を集めて、大般若經の轉讀をなさしめた。天皇の即位式が行はれる時一代一講の仁王般若經の講義をなさしめるなどが、玄蕃寮の主な役目であつた。僧侶の着る法服のうち、九條の袈裟は絹五丈で作り、七條の袈裟は絹三丈八尺八寸、五條の袈裟は三丈七尺五寸などと、その制を定めるのも、この寮の指圖であつた。

諸陵寮は各天皇皇后皇太子の陵墓を監理し、毎年十二月に弊を奉る役目であり、陵には陵戸五煙、墓には墓戸三煙をおいた。昔は一戸二戸と云はず、一煙二煙と云つたのである。たとへ一軒の家に同居してゐても、世帯が別別であれば、各自に一煙の義務と責任を負うてゐたのである。毎年二月十日には吏員を派遣して、陵墓を檢視せしめるのがこの寮の役目であつた。

治部省は陰陽道の一部であつて、大瑞、上瑞、中瑞、下瑞の現はれることを待つて、これを宮中に報告する役目である。大瑞に五十七種あつて、景星、慶雲の出現を待つてこれを宮中へ報告すると天皇は百官の賀を受け、その位を進めるのであつた。このほか鳳、比翼鳥（一翼一目の兩鳥並び飛ぶ）、永樂鳥（五色でくちばしだけ赤く、鳴き聲は天下太平と鳴く）、神鳥（水を踏むも没せず、一日三萬里を飛ぶ）、醴泉などの現出であり、上瑞とは白狐、白鹿、赤雀、甘露など三十八種の瑞祥で、中瑞とは白鳥、白雉、白雀、白兔など三十一の瑞祥で、下瑞とは竹に實が生じ、木が連理となるなど、十四の瑞祥である。この省の役人達は夜となく晝となく、この瑞祥の起る

ことを待つて、これを上奏したのである。

孝徳天皇が始めて大化といふ年號を定めた五年目に、周防の國から白い雉を献じたので年號を白雉と改めた。これが日本における改元の最初で、文武天皇の時赤い雀が出たので、朱鳥と改元し、文武天皇の五年に對鳥から黄金を奉つたので大寶と改め、高田首久比麻呂が長さ七寸巾六寸で、左の眼が白く右の眼の赤い龜を献上したので、靈龜と改元したのであつた。養老といふ年號は、美濃の多度山に靈泉が出て、元正天皇が行幸入浴されたためにつけた名であり、聖武天皇の元年を神龜といふのは、白い龜が現はれたからであり、それから五年後に背に天王貴平知百年といふ七字が、自然に書かれてゐる龜を奉つたので、天平と改元したのである。天平勝寶は陸奥から黄金を奉つたので、日本に始めて黄金が出たといふのを記念してつけた名である。

かくの如く年號の變るのは、陰陽博士が奉つた勸文によつて、善政が天に感じて瑞祥を現はすのだと信じたのである。この改元は國家の運命に關する大事件で、今日の憲法改正に等しい重大な事件であつたと、久米邦武博士は云つてゐる。（日本古代史と神道との關係）こんな重大な役目を持つてゐた陰陽寮は、新年毎に害氣を鎮めるため、宮門の内外に深さ三尺の四角な穴を掘り、役人達は陰陽師と共に杵を取つて、害氣消除、人無疾病、五穀成熟と唱へつつ、その穴を搗いたのである。それから曆の事業として、曆本一百六十六卷を作り、天文博士は常に天候を見て、異變



ある毎にこれを記し、密封して天皇に奉り、曆博士は日食の観測を怠らず、天皇の行幸があると陰陽博士と漏刻博士一人が随行して、その行在所の悪鬼を拂ふため、へんばいを行つたのである。日の出、日の入を揭示し、宮城諸門の開閉は陰陽寮の指揮に従つて、太鼓、鼓を打つてこれを知らせる。そして大寒の前の日の夜半に、宮廷内へ土牛を立て、立春の前の日の夜半にこれを取り去るのも、陰陽寮の役であつた。これは農民のために豊作を祈る一つの行事であつた。

この陰陽道は當時の國家にとつて、最も大切な學問で、國家がまづこの陰陽道に頼つて政治の行ひ方を教へられたので、一般社會でも深く陰陽道を信用して、遂には九星術、八門とん甲術、家相方角など數多くのまじなひとなつて、深く人民に食ひこんで行つたのである。

この陰陽道と神祇官とが結托して、死荒、血荒のけがれを強調し、佛教に當つたことは、大神宮諸雜事記に精しく書いてある。天皇が病氣になるとすぐこれを占つて、伊勢の方に當つて死荒があるとか、血荒れがあるとか云つて勅使を伊勢に派遣し、事實を取調べて大はらひを行ひ、神職を免職したことが、數十回にのぼる。

稱徳天皇の神護景雲元年十月三日に、伊勢の逢鹿瀬寺を長く皇大神の神宮寺と定める宣示が下つた。神職達は伊勢に神宮寺をおくことに反對であつたに違ひない。けれども天皇の宣下であるから如何ともすることが出來ず、そのままになつてゐたが、稱徳天皇崩御の後、光仁天皇が即位

するや、皇大神宮の神職達は、折あらば佛寺を神宮の附近から追ひ拂ふべくかまへてゐた。寶龜四年九月二十三日に、神職石部綱繼と逢鹿瀬寺の僧海圓との間に口論があつて以來、神職達はますます神宮寺に對して敵意を強くしてゐたが、六年六月五日に神職方の石部楯矛、吉見私安良數人が、皇大神に奉る鮎を逢鹿瀬川に取りに行つた時、逢鹿瀬寺の小法師等三人が出て来て、石部等を侮辱し、御膳寮の鮎をけがしたので、その用をなさなくなつたといふことを、寶龜七年二月三日神祇官に上奏したので、神祇官から公家に奏問し、時の左大臣が天皇の勅を奉じて、逢鹿瀬の神宮寺を永久に停止し、飯高郡へ引越すべく命令が達せられたのであつた。鮎がけがされたといふのは、たぶん小法師等がその鮎の入れてある籠に手をふれたくらゐのことであらう。けれどもその小法師等のしたことが大問題にせられ、神宮寺が伊勢神宮から追放されたのであつた。この宣下があるまでのいきさつは、精しくわからないが、無論神祇官と陰陽寮へ相談があつた結果に相違ない。それはかの豪腹な平清盛が、帝都を福原に移した時、誰一人公に反對する者がなかつたが、一人の陰陽師が勸文を清盛に送つたのを見て、さすがの清盛も再び都を京都に移すことにしたのであつた。それほど陰陽師の説は強く人を動かしたものである。佛教と神社の關係は、遂に融和を見なかつたが、何としても佛教に巻きこまれまいとして奮闘したのは伊勢神宮で、この神宮寺追放は日本神社の佛教に對する凱歌の第一聲といふべきである。



## 太陽教の役員達

天之御中主命——第一代太陽教主。

高御皇靈命——これは一族の名で、個人の名ではない。太陽教主の一家と結婚する外戚となる補佐の臣である。その戸主は代代高御皇靈命といふ。

神御皇靈命——これも個人の名でなく、高天之原族と結婚する出雲族長の一族の名で、代代の戸主は神皇靈命と云つた。神とは神聖の意味でなく、かげやみの約で、日の没する西方出雲を云ふのである。

うまし・あし・かび・ひこぢの命——第二代太陽教主、名の意味は、美し・明し・輝く日・日子父、の意である。換言すれば、天照す男神である。

天之常立命——高天之原の根底を固めた第三代太陽教主。

國之常立命——第四代太陽教主で、出雲族の出身である。

國さつちの命——第五代の太陽教主で、出雲族から選ばれ、出雲族を幸福にした父、と呼ばれた人である。故に國幸父の命といふ。

豊國主命——第六代太陽教主で、常世族から選ばれた人である。

浮泥土命（うひちに）——第七代太陽教主で、その齋主を、洲泥土（すひちに）命といふ。齋

主は未嫁の少女で、たぶん出雲族であらう。

綱杭命（つぬぐひ）——第八代太陽教主で、その齋主を、生杭（いくぐひ）命といふ。

大殿主命（おほとのじ）——第九代の太陽教主で、その齋主を大殿女（おほとのめ）命といふ。

面足命——第十代太陽教主で、齋主を、賢姉（かしこね）命といふ。

伊邪那岐命——第十一代の太陽教主である。

伊邪那美命——出雲族の女首長で、高天之原族の伊邪那岐命と共に、國生みの事業に着手したのである。

水蛭子命——國生みの時高天之原族から選ばれて、出雲族のために三年間助けしめたが、命を奉じなかつたので流刑に處せられた。

穗の早別（さわわけ）命——國生みの時淡路の國主となつた高天之原族で、別とは皇族の分家といふ意味である。

愛媛（えひめ）命——國生みの時伊豫の國主となつた女性。

飯依比古命——國生みの時讃岐の國主となつた人。

大食津（おほげつ）姫命——國生みの時阿波の國主となつた農業の權威者。



建依別命——國生みの時土佐の國主となつた人。建依は、たけくよろしの意である。  
 天忍許呂別（あまのおしころわけ）命——國生みの時隱岐の國主。名の意味は、おしは大、こ、ろは、たけき意。

白日別命——國生みの時の筑紫の國主。

豐日別命——國生みの時の豊の國主。

建日向日豐久士泥別命——國生みの時。肥の國主。

建日別命——國生みの時の熊襲の國主。

天一柱（あめひとつはしら）命——國生みの時の壹岐の國主。

天之挾手依姫命——國生みの時の對島の國主。

建日方別命——國生みの時の吉備の兒島の領主。

大野手姫命——國生みの時の淡路の小豆島の領主。大ぬでとは、大鈴の意であらう。

大多麻流別命——國生みの時の肥前大島の領主となつた人。

天一根命——國生みの時の筑前女島の領主となつた女性。

天忍男命——國生みの時の筑前志賀島の領主。

天兩屋命——國生みの時の播磨の双兒島の領主。

以上十八個所の國主領主を定めた時、佐渡の國主は誰であつたかわからない。

大事忍男命——大事件を解決する裁判長の如き役目を持つ人。

石土彦命——土木監督官。

石洲姫命——石と砂を監督する人。

大戸日別命——太陽教本部の宮庭を守る役。

天之吹男命——屋根の葺き方を監督する役。

大屋日子命——家屋建築を監督する役。

風木津別之忍男命——風木（ちぎ）に關することを監督する役。その頃の建築には風木は重要な部分であつたから、この木を選ぶ必要があつた。熊野の千穂が峯の一名を、風木屋谷といふ。

天之吉葛（よさづら）命——建築用の葛を育てる役。當時の建築は釘を用ひず、ぐす葛でしはりつけたのである。今日でも稻を乾かすサガリは、丸太をくす葛で結びつけて立てる。

國之吉葛命——出雲族の建築に用ふる葛の監督者。

天之眞浦命——一名、目一つの命といふ。刃物を造る鍛冶のこと。

あすはの命——足場を監督する人。この頃道路といふものがなかつたので、通行人のために足



場をこしらへることを監督したのである。

みか早日命——いかめしく猛きこと火の如しの意。

樋早日命——火の如く猛き靈の意。

建みかづちの命——建御嚴津父の意。ふつ主命ともいふ。ふつとはよく斬れる意で、よく斬れる刀を持つてゐる主、といふこと。豊ふつ主命ともいふのは、名劍を多く持つてゐるからである。

くらおかみの命——谷の水を守り、雨を請ふ役。

くらみづはの命——飲用水、灌漑用水を守る役。

金山彦命

共に鑛山を監督する役。

金山姫命

壇安彦命

共に赤土を守る役。

壇安姫命

丹生津姫命——日本中の赤土を監督して、溝、田の水を保たしめ、祭器を造らしめる總監督。

水はの女命——谷及び川海の水についての注意をする役。

豊受姫命——農業を監督する役。

泣澤女命——高天之原と出雲との合併が失敗に終つた時、非常にこれを悲しんだ女性。

石さくの命

根さくの命——高天之原と出雲との合併が失敗した時、高天之原族を激勵した勇氣ある武士。

天之くらどの命——高天之原の谷を守る役。

國のくらどの命——出雲族の谷を守る役。

大戸惑子命——山の大きなたわを守る男性。

大戸惑女命——大きなたわを守る女性。

天之鳥船命——早船を司る役。

大食津姫命——食料を増産する役。

火のかぐ土命——やぎ早男命、かがや日子命の別名がある。ほむすびの命ともいふ。火の如く輝く勇ましき男といふ意味で、伊邪那美命を説いて出雲に連れ歸つた若武者。

天之くひぎ持命——くひぎとは、汲みひさごで、昔はひさごを作つてその小さきものは水を汲むに用ひ、大なるものは桶、火鉢などに用ひた。水を汲む器を、ひしやくといふのは、ひさごの轉である。このひさごを身にしばりつけて浮袋の代用となし、船べりに數十のひさごをしばりつけて、船の轉覆を防いだものである。このひさごの生産を守る役目。



國のくひざ持命——出雲族のひさご培養を監督する役目。

しなつ日子命——風無所の意で、今日でいふところの二百十日、颱風の襲來を防ぐ役。今もその方法が行はれてゐる。

くぐのちの命——森林を守る役目で、木木の父の意である。

大山祇命——山つみとは、山持ちの意で、日本中の山を司配する豪族。

眞坂山祇命——険しい坂を登つて頂上に達する山の司配者。

おと山祇命——坂を下りた所の平野を守る役。

奥山祇命——山の奥にある樹木を守る役。

くら山祇命——長い谷のある山を守る役目。今日でも谷山といふ地名が所所にある。

しぎ山祇命——繁き山持のこと。

は山祇命——山の麓を守る役目。今日でも羽山といふ地名または苗字が所所にある。それは皆

山の麓といふ意味である。

原山祇命——原山とは小山が多く並んだ土地で、そこに木を植ゑ、草を育てることを監督する役。

戸山祇命——戸山とは外山の意味で、越中の富山もこの外山である。一部落の外にある山を監

督する役目。

かやの姫命——屋根を葺く材料の萱を保護する役目で、野づちとも云ふ。野の持主の意である。

天之狹土命——國と國との境には山があり、その山を登る坂を守る役目。今日でも坂の麓とそ

の峠とに茶屋のあるのは昔の坂を守つた習慣の名残りである。

國之狹土命——高天之原の坂守天之狹土命に對して、出雲族の坂守を國之狹土命と云つたので

ある。他國から歸つて來た人を迎へる坂迎ひの習慣は、近頃まで行はれた。

天之狹霧命——狹霧とは堺の意で、高天之原族の所有地の堺を守る役。

國之狹霧命——出雲族の所有する土地の堺を守る役。

手置帆負（たおきほおひ）命——大工の元締。紀伊名草郡忌部の祖先。木の長さを計るに、手

の指を用ひた故に手置といふ。帆は尋（ひろ）、負は司るで、建築材料の長さ廣さの調べ

役。今でも大工の祭る神。

ひこさしりの命——ひこは日子、さはさし（尺）、しりは司るで、今日の度量衡の元締。

大海津見命——海運業の總取締りで、大海持の意。

早秋津彦命

早秋津姫命



山奥から土砂が流れて来て、川口をふさいだ時、そこを掘り割つて船筏を通はす役目で、彦は海を受け持ち、姫は川を受持つたもの。

沫なぎの命——遠浅の海の波が白き沫となつて打寄せ、渚の上に打上げて来る所を守る役。すなはち船などを砂の上に引上げる男の役目。

沫波命——遠浅の海岸に生ずる海草を取り、または貝類を取することを監督する役。

つらなぎの命——つらとはつぶらで、小石の多くある所に出来る波は、つぶらであるから、つらなみといふ。その波が渚に打上げる所の船などの始末をする役。

つらなみの命——つぶら波の打ち寄せる海岸を守る役。

天之水分命（みくまり）——高天之原領の水利組合長。

國之水分命——出雲領の水利組合長。御籠神社は、みくまりの轉化であらう。

へざかりの命——邊疎りの意で、海邊を遠ざかつた所を監視する役。

沖さかりの命——沖へはるかに出で行く船を守る役。

沖つなぎさ彦命——沖合となぎさとの間を監視する役。異國船海賊船などの監視。

へつなぎさ彦命——海岸のなぎさを監視する役で、漁具船具などを保管する人。

沖つかひべらの命——かひは間の意で、沖と海岸の間を注意する役。

へつかひべらの命——海岸と海岸との間を守る役。甲の濱から乙の濱へ海草などを取りに来る者を調べる役。

くなどの命——來莫所の意で、一種の關所守である。ふなどの命ともいふのは、經莫所の意であり、塞の神といふのは塞目を守る意。俗に道ろく神と云つて全國到る所の道路の分岐點に建てた石で、道祖神、道あへの神などといふ。

表土男命——田の上土を監督する役。

赤土男命——田の水を保たせるため、赤土をはることを監督する役。

底土男命——田の赤土をはる前に、底土を完全に置くことを司る役。これらの三つの役目を擔任する三人は、いざなぎの命に従つて和泉の堺に来て住んだ。この一族を後に住吉様と呼んだ。

日かなさくの命——志賀島にゐた海津見族の子孫で、信濃の國に行つて農業を奨励した篤農家。別名を穂高見命といふ。信濃の穂高山から來た名で、南佐久北佐久の佐久は、この日かなさくの開いた土地であらう。

大日女命（おほひるめ）——第十二代の太陽教主、後に天照坐皇大御神、略して天照大神といふ。伊邪那岐命が伊邪那美命と別れた後、太陽教主として推薦した人で、その父母はわか  
らな  
い。



須佐之男命——伊邪那岐命が常世の國の司配者として選んだ人。

月讀命——伊邪那岐命が出雲領の司配者として選んだ人。

以上の三人を三貴子といふ。

たぎり姫命

いちき島姫命

たきつ姫命

以上の三人は天照大神が養女として選び、そのうちの一人を十三代の太陽教主にするはずであつたが、相談まともらず筑前宗像に行き、外國との交通を監視した。今の宗像三神がそれである。

正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命（まさかあかちかはやひあまのおしほみみ）——須佐之男命が推薦した出雲族出身の十三代太陽教主候補者であつたが、遂に教主の位につかず紀伊の熊野に行き、熊野忍踏（おしほみ）命または熊野楠日命と云つたが、後九州彦山に行き身を終つたらしい。

天之穗日命——須佐之男命が推舉した十三代太陽教主の候補者であつたが、高天之原族と出雲族との調停につとめ、國ゆづりの後出雲に行き、大國主命を守つて今日までその子孫が出

雲大社の神主となつてゐる。

天津彦根命——須佐之男命が太陽教主の候補者として推舉した人であつたが、その位につかず、

伊勢の桑名に行つて住んだらしい。國幣大社多度神社の祭神はこの天津彦根命である。活

津彦根命はこの命と同一人である。

石こりとめの命——常世の國から来た人らしく、山から鑛物を掘ることを監督したらしい。八

咫鏡はこの人の採掘した鑛石で造つたらしい。

玉の祖命——まが玉を製造する指導者。

太玉命——太玉のたまは手向けの意で、たすきをかけ、にぎて（幣物）をかけた榊を捧げて神前に供へる役をした人である。今でも玉だすきといふ言葉がある。それはこの命が手向け

の時かけたたすきの名残りである。

天之兒屋根命——こや、ぬは言綾音の約で、神をなくさめ祭るために言葉美しき祝詞を作つて、

これを讀む人。

太力男命——天之岩戸を引き開けたと傳説される力持。

うすめの命——おぞめの命の意味で、勇敢な女といふことである。今日でも恐ろしいことを、

おぞいといふ。天の岩戸がくれの時、俳優となつて活動した女である。巫の先祖。



五十猛命——須佐之男命と大夜之女命との間に生まれた長男で、海外から木種を持って来た植林家で、紀伊の國をもと木の國と云つたのは、この人が植林をしたためである。後に官幣中社いだきそ神社に祭らる。

大國主命——須佐之男命と櫛なだ姫との間に生まれた人。大名持命、葦原しこ男命、八千矛命、大國魂命など多くの名あり。

大年命——須佐之男命と大山津見家の大市姫との間に生まれた農業奨励者。

御年命——大年命の子で、父大年命と共に琵琶湖畔の農民に耕作の法を教へた人。

大山昨命——父大年命兄御年命と共に農業に従事し、近江の日吉山の一部牛尾山に葬られた人。後に官幣大社日吉神社として祭らる。

木保命——御井命ともいふ。大國主と因播の八上姫との間に生まる。

味すき高彦根命——大國主と越の沼河姫との間に生まる。別名を一言主命または言避(ことさ

か)命といふ。

事代主命——大國主と神屋楯姫との間に生まれ、父の跡をつぐ。

建御名方富命——大國主と沼河姫との間に生まる。

八坂とめの命——海津見家から建御名方富に嫁して、信濃の農業開發に努力した人。

少名彦命——常世の國の人で、日本に来て大國主命と共に國土開發につくした人。紀伊加太の淡島神社はこの人を祭つたのだといふ。

久延彦命——海外から日本へ農業を教へに来た人らしく、一本足で踊ることが上手であつたため、今も一本足の案山子(かかし)として記念せられてゐる。

天之火明(ほあかり)命——忍穂耳命の長男。

天にぎし國にぎし天津日高日子穗ににぎの命——第十三代太陽教主で、忍穂耳命の次男。九州

高千穂に下る。始めて大山津見家と結婚した太陽教主。

日子ほほ出見命——第十四代太陽教主で、始めて海津見家と結婚した太陽教主。

日子なぎさたけらがやふきあへすの命——ほほ出見命と海津見族豊玉姫との間に生まる。

日子五瀬命——海津見族玉依姫とうがやふきあへすの命との間に生まれた、第十六代太陽教主。

神やまといはれ彦命——日子五瀬命の弟で、玉依姫の子。第十七代太陽教主で後に神武天皇と

いふ。

天國忍はるか廣庭命——第四十五代太陽教主で、この時はじめて佛教日本に来る。後に欽明天

皇といふ。

首(おびと)命——第六十一代の太陽教主で深く佛教を信じ、自ら三寶の奴と云つた。後に聖



武天皇といふ。

阿倍命——剃髮して尼となつたまま第六十二代の太陽教主であつた、孝謙天皇。

大伴命——第六十九代の太陽教主で、後に淳和天皇といふ。深く陰陽道を信じ、死後その骨を山上にまき散らせと遺言した。

睦仁命——第三百三十八代の太陽教主で、欽明天皇以來の佛教を皇室より排除した。明治天皇はこの人である。

裕仁命——第四百四十代の太陽教主であつたが、昭和二十一年一月一日に、朕は顯つ神にあらずと宣言して、太陽教主を辭し、全然太陽教と關係なき天皇となる。

追記

「迷信の話」に續いてこの日本神社考四百二十四枚を、本日脱稿することが出來た。殆ど失明に近い視力の私を助けて、忠實にその口授を筆記せられた原田夫人喜久子氏に、深く謝意を表すことを附記しておきます。

昭和二十六年八月三十一日

淺間山麓千ヶ瀧にて  
著者 沖野岩三郎しるす



昭和二十七年一月十五日印刷  
昭和二十七年一月二十日發行

日本神社考

定價 二八〇圓  
地方賣價 二九五圓

著者 沖野岩三郎

東京都中央區銀座西八ノ八

發行者 株式會社 恒星社厚生閣

代表者 岡本正一

東京都文京區小石川表町七三

印刷所 松榮印刷所

東京都中央區銀座西八ノ八(都ビル)

株式會社 恒星社厚生閣

電話銀座(57)三五一六  
振替東京五九六〇〇番

發行所

版權所有

不許複製



## 武天皇といふ。

阿倍命——剃髪して尼となつたまま第六十二代の太陽教主であつた、孝謙天皇。

大伴命——第六十九代の太陽教主で、後に淳和天皇といふ。深く陰陽道を信じ、死後その骨を山上にまき散らせと遺言した。

陸仁命——第三百三十八代の太陽教主で、欽明天皇以來の佛教を皇室より排除した。明治天皇はこの人である。

裕仁命——第四百十代の太陽教主であつたが、昭和二十一年一月一日に、朕は顯つ神にあらずと宣言して、太陽教主を辭し、全然太陽教と關係なき天皇となる。

## 追記

「迷信の話」に續いてこの日本神社考四百二十四枚を、本日脱稿することが出來た。殆ど失明に近い視力の私を助けて、忠實にその口授を筆記せられた原田夫人喜久子氏に、深く謝意を表すことを附記しておきます。

昭和二十六年八月三十一日

淺間山麓千ヶ瀧にて

著者 沖野岩三郎しるす







